

## 序

長野県松本美須ヶ丘高等学校長

清水和彦

本校文芸クラブの女生徒十余名が顧問の細川教諭の指導のもとに、安曇村から始まって野麦峠を越え、飛騨側の高根村迄足をのばして民話の採集を始めたのは昭和五十二年の夏休みからであった。

尤もこのクラブの民話採集はこの年に始まったものではないが、この年と翌五十三年の夏休みの二年をかけてこの地域の民話を蒐集し、その都度本校の文化祭である双蝶祭に発表して好評を得てきた。私もその展示を見に行つて彼女たちに説明をしてもらった。それは単に民話の説明に止らず、地図や写真があり、はては民話を紙芝居にして説明している者もあった。そんな事が今私には印象深く思い出されてくるのである。

今更そうして集めた民話が集大成されて刊行される事で、生徒たちの苦勞が報われる事になり、私も喜びに堪えない。

ただ本書はそれだけに止らず、一読しておわかりのようにその民話や野麦峠を中心とした地理的歴史的考察が細川教諭によつてなされており、同教諭が昭和五十四年度より松本深志高校に転勤され、その後を征矢野教諭が引継いだのであるが、同教諭の「野麦街道、奈川の石造物」の論文と相俟つて本書の価値を一段と高らしめている。

野麦峠については今更私が申す迄もなく現在ブームになっている。しかし古来この地域がどのような交通の要路にあたつていたか、そこにはどのような人達がどんな生活をこの峠を舞台にして営んでいたのか、そのことを本書によつて知つて頂きたい。

その歴史の営みの中から本書に取り上げられた多くの民話が生れたものであることも、併せて知つて頂きたいと思う。

放つておけば確実に失なわれていくもの、それが民話なのである。

昭和五十四年六月

## 発刊によせて

児童文学者

松谷みよ子

『野麦街道の民話』は貴重な本である。すたれゆく街道の民話をとどめた資料としての大切さがまずあり、村人の語る息づかいまでがきこえてくる語りの文章がまたいい。

——二軒の家のあいさに、ちようどぐええのいい石があつたもんだで（中略）その石に鞍をのせて、練習したってさ。ほれ、あつこにあるじゃねえか。あの石だ。ちようどいい格好しているすら——

語りのテープを整理したものというが、長年民俗にとり組んできた細川修氏の目と筆の確かさだろう。一話一話のミニ解説も話型・類話・その心をよく捕えている。

細川修氏というよき先生の指導のもとに、二年間かけて採話をした美須々ヶ丘高校生、文芸クラブの日記も楽しい。「雪が糶料と血で赤く染った」という女工哀史を秘める旧道をあえぎながら越え、「民話はありませんか」というチリ紙交換方式では駄目だと身をもって知り、口の重いお年寄りから話を聞きだしたこの仕事は、一生忘れ難い真の勉強になったことと思ふ。

# 野麦街道の民話

## もくじ

○序	学校長 清水和彦	1
○発刊によせて	児童文学者 松谷みよ子	2
信州の話		
○秀綱さま	大野川	9
○弘法清水二話	入山	17
	川浦	20
○天狗の滝	追平	23
○追平のしだれ栗	追平	30
○勝山さまの鞍かけ石	大平	34
○石の伝説二話	古宿	38
	大尾沢	40
○柏木のあみださま	柏木	42
○小沢寺の話	小沢寺	46
○むじなに化かされて死んだ先生	奈川渡	49
○龍宮淵	神谷	53

○寄合渡獅子舞縁起

寄合渡

56

○大男の話

川浦

58

○乗鞍へのぼったいわな

川浦

61

○きつねに化かされた話

川浦

63

○むじなとちようちん

川浦

67

○桃の木と相撲

川浦

69

○たいこの皮は山犬の皮

川浦

72

○牛方と青魂

川浦

74

○比丘尼の墓

川浦

77

### 奈川民謡

#### 探訪日記

79

87

### 野麦街道の村と町

○野麦街道

99

○野麦峠

101

### 信州側の村と町

○波田町

107

○安曇村

108

○奈川村

110

—— 寄稿 ——

- 野麦街道のボッカと牛方うしかた……………筑波大学 胡桃沢勲司……………123
- 野麦街道・奈川の石造物……………文芸クラブ顧問 征矢野宏……………125
- 奈川村のワラビ粉……………文芸クラブ顧問 細川 修……………148

話者スナップ……………160

話者一覧……………164

あとがき……………166

編集後記……………168

さし絵・カット

丸山邦江・赤羽美和子



信  
州  
の  
話





秀綱さま

秀綱さまは、飛驒高山の殿さまだった。

天正十三年（一五八五年・室町時代末）、松倉城主姉小路自綱は、金森長近（豊臣秀吉の家来）に攻められた。

その城もおちようとするとき、父自綱は、秀綱をよんでいった。

「この城も、もうこれまでじゃ。われわれは、ここで自害する。それが、武士としてのせめてもの意気地じゃ。じゃが、名門姉小路家をここで断絶するにはしのびない。」

おまえたちは山をこえて、信濃へ落ちよ。」  
一子秀綱にお家存続の命運をかけて、秀綱夫人の里、東筑摩郡波田の淡路城で、後日のばんかいははからせようとしたのである。

その初秋のころ。

飛驒から信濃へといそぐ、一群の人々があつた。秀綱さま一行が、しのんでいく、落人の群である。

しかし、多勢の旅は、人目につく。

「これでは、追っ手にもみつきやすい。  
おちあう所を、島々ときめ、ひとまず、ば



らばらにわかれよう。奥は、徳本峠をこえよ。わらわは、安房をこえて、大野川へでる。

つき人一人だけをつれて、奥方とわかれた秀綱さまは、大野川の里庄の家に宿をとった。

しかし、追っ手は、すぐに追った。

「この家に、秀綱卿がかくまわれていると聞いてきた。はようたされい。さもないと貴様も……。」

と、里庄を責めた。

しかし、人のなさけを知る里庄は、秀綱さまを、(大きいザルに紙をはったもの)ぼてのなにかくまい、桑をかけ



てかくしてくれた。いつくら屋さがししても、探しだせなかつた追つ手は、

「いいや、たしかにこの家にはいったはずだ。かくなるうえは、火をつけて、もろともに焼きほろぼしてくれるわい。」

と、強をにやしてりきんだが、びくともせず里庄は、

「いないものは、どうしたつていませぬ。火をつけるなりしていただいてもようござんすが……。今はけたばかりのお蚕さまには、罪のかけらもございません。そとへだしますで、ちよつとおひまを……。」

と、蚕と桑をもちだしてくれた。秀綱さまは、もう一歩のところ、里庄によつて、助けられたつてわけだ。

それからというもの、大野川の里では、桑もよくでき、蚕もそれはよく育つた。

秀綱さまが、蚕玉さまとしてまつられるようになったのも、これからだといふ。

その後、秀綱さまと家来は、祠峠にさしかかり、百姓の家たちよつて、あ  
わめしでもてなされた。秀綱さまはそのとき、難儀しているであろう奥方のこ  
とを思いやつて、

「あわて、つらいと思うな、おなご。」  
（「あわないてゐるからといって」と思うな、奥方よ、「あわめし」の「あわ」と「金わ」をかけている）

と、すぐさま詠んでみせたという。

百姓のもてなしをよろこんだ秀綱さまは、もっていた金銀の小粒を、ちやわ  
んいっぱいさしだして、出立した。

しかし、これがよくなかった。金にめぐらんだ峠の百姓は、手をまわして  
攻めた。

峠をくだつたところで秀綱さまは、角が平の絶壁においつめられたが、その  
ときもつていた金は、

「この金ぜんぶ石になれ」

と、淵ふちになげ、秀綱ひでつなさまも、やはり身をなげて果はてた。ここを秀綱ひでつな淵ぶちという。このとき淵ふちに沈しずんだ金銀きんぎんは、深い川底がせぞこに、キラキラ光ひかつてみえたが、里人さとびとがひろうと、たちまち小石せうせきにかわり、欲深よくふかい峠たもとの村も、悪病あくびようで亡ほろんでしまったと伝つたわつとる。

○ ○ ○

一方いっぽう、徳本峠とくほんたもとをこえて、鳥々とりどりへの道みちを急いそいでおつた奥方おくかたの一行いっぺいは、とちゆう、持参じさんした梨なしを食たべてはかわきをいやした。

そして、その種たねを地ちにおとしては、

「姉小路あねこうじの家いへ、再興さいこうの期きあらば、ここにはえた梨なしの実みよ甘あまかれ(そくてなれば)。しからずんば、渋しぶかれ。」

と祈いのつた。

ここに実みる梨なしの皮かわが、厚あつくて渋しぶいのは、このためだという。

しばらくして、狩人かりゆうどにいきあつた奥方おくかたの一行いっぺいは、道みちをきいたんだが、狩人かりゆうどは、

「こんなところに、こんな山奥に、人間がおるはずはねえ。それも若い女だ。なんかがばけどるにちげえねえ。そういえば、きつねは、うんと身なりのいい、うつつくしい女になるっていうし……。」

と、おどろいた。

「いいや、そうでは、ごさいません。これこれ、しかじかの者で……。」

と、いつくら話したつて、いちど見まちがった目は、なかなか直しきれん。

「うちなさるな。うつてくださるな！」

いくら頼んでも、いよいよおつかなくなるばかりの狩人は、思いあまつて引き金をひいた。

**ズドーン!**

銃声が、深い山々にこだまして、奥方は、なげきうらみ、ふところの鏡に身を写しながら、

「鏡は女のたましいの宿るところ、たましいは永久に鏡にのこり、うらみをは

らさん。」

と、髪をさかだてて息たえた。

そのごいく日かたち、狩人がそこをおつてみると、奥方は、鏡に身を写したままに美しく、ちつともかわつていなかった。ふしぎに思つてよくみれば、顔には笑みがただよつとる。——と思つたのと同時のことだった。奥方は、ぐだぐだつとくずれおちてしまつた。

狩人は、まつ青になり、ほうほうのていで、山を転がりおりたが、そののちまもなく、癩の病となり、身体がくずれて死んだという。

はなし／ 黒川渡 鈴木 義道さん

川浦 奥原喜運治さん

高山市 小島千代蔵さん

へノート

いわゆる落城悲話。この種の話は広く全国的な広がりをもち、落人伝説と関わつて、落武者のかくまい方でその村が栄えたり亡んだり、植物の生育が変化するというのも、落城伝説の典型の一つである。



弘法清水・二話

入山の弘法清水

この村の入山部落の南にあるこみちは、鎌倉街道だ。鎌倉往還の道だて、むかしやあ、旅人の行き来でさ、なかなか繁盛したってこんだ。

そこに、いつくから日照りがつづいたって、ぜったい枯れねわきで水がある。それに、どのくれ荒れたつても、にごらん、ふしぎな清水だ。

おおむかし。

弘法さまが、国めぐりのとちゆう、たまたまこの道をおとおりになつて、入山へおいでになられた。

わざわざ身をやつしての旅だったし、不便な長旅のつかれとよごとで、そ

れこそ) ねこさこじき坊主の風体であつたと。

おまけに、その時分の村はといえは——いく日も日照りがつづいておつた。谷の川は白く枯れ、あたりいちめんすつかり赤つ茶けて、青いものひとすじもみあたらん。それはえらいけんまくだつたとい

う。  
そんな食うや食わずのこの村へ、ひとりのこじき坊主が、たどりついたつてわけだ。

「まつたく人めえわくな……。いつまでここにいろのだらうか。」「  
「えりにえつて、こんなときに、困りむんだぜ。」

「にわとりにくれるふすまだつてねえつてうに。  
「そうかつて、たくはつにでもこられた日にやあ、まんざらみぐせえ顔もできねえしな……。」



だが、いちどは顔をしかめた村の衆も、しんは心やさしい人たちだ。食を乞えば、食をあたえ、宿を乞えば、土間のかたすみにも、どめてやったという。この村の衆のもてなしに、心うたれた弘法さまは、村人のえれえ困りようをみるにみかねて、難儀をなんとかすくつてやろうと、しばらく瞑想読経しておられたが——やがて、手にした錫杖で、かたわらの岩をおつきになつた。すると、どうだ。

そこから、こんこんと清らかな水がわきだしたではないか。

村人のよろこびようは、ひととおりにあない。これをたたえて、弘法清水とよび、今に伝えているのだという。

はなし／ 黒川渡 鈴木 義道さん

川浦の弘法清水

これも、おんなじ時分の話だ。

川浦へもおいでになった弘法さまが、こどもたちをかたつて、それ、その山へのぼっていったんだ。

ところがこどものこんだ。一町もあるかんうちに、へえ、弘法さま、のどあかわいちゃつた。水あのみてえ。」

なんて、さわぎだしたんだ。

弘法さまは、

「そうか、そうか。こどもは、仏の生まれかわりだ。ようし、よし。」  
と、かたわらの枯れ枝をひろつて、ここの草っ原をちよいついたつてうん

だ。すると、そこから、うつつくしく澄すんだわきでの水がこんこんとわきだした。

それが、この清水しみずだよ。今いまでもこのとおり、こんね（こんね）に高いたかいところに、ちつとも枯れんで、でているってわけさ。ふしぎな、ありがてえ水だぞよ。

また、いつのころからか、この清水に岩魚いわなが住すむようになってな。その岩魚は、ちよいちよ乗鞍のりくらの池いけまで、遊あそびに（行ったもの）いったむんだとよ。

はなし／ 川浦 奥原喜運治さん



へノート

弘法清水の伝説は、全国的に多く、東北から九州まで各県にみられる。

その多くは、弘法大師が諸国行脚の折に水を求め、水をさしあげた村には、恩に報いるために水の便をはかり、逆に面倒がって洗濯水や米のとき汁を出した場合には、水を濁らせてこらしめるというモチーフて語られるが、『日本伝説名彙』は十の型に分類している。

長野県でも、佐久・長野・東筑摩郡朝日村・信州新町・北安曇郡白馬村・大町市・北安曇郡小谷村・木曾などに類話も多い。その中でも、北佐久郡白田町・北安曇郡白馬村北城新田・木曾郡王滝村の話は、「入山の弘法清水」のタイプで、佐久南牧村海ノ口のもものは、子どもにせがまれて水を出す、川浦の話と同類のやさしい話である。

その他、弘法大師は、伝教大師や連如上人として語られる場合も多いが、いずれにしる大子信仰の布教にたずさわった人々が説いた大師の偉大さが、この種の伝説の源となったものと考えられている。

## 天狗の滝

むがし、追平の滝には天狗がおつたそうな。いたずらしては追平の衆を困らせたと。

ある日のことだ。一人の獵師が、けだものを追つて天狗の滝近くにくるとなあ、フツとかき消すようにけだものがみえなくなつてしまつた。

「おつ、急に消えた。おかしいぞ。」

ど、ぼんやりしておると、今度は、てめえの頭がブーツとしてきて、フラフラと滝の岩穴に誘いこまれてしまつた。

ほうしたら、おかしいじゃねえか。入つてすぐさま、ほら穴はびたつとしまつちまつたんだ。あわてて出口をさがしてみたが、どうにもならん。どうどう



7



三日三晩どじこめられてしまったと。

ほうしたら、またふしぎじゃねえか。三日三晩たつたら、ほら穴の入り口は、またほかつとあいたんだ。

獵師は、青くなつて逃げだして、後もみずわが家にかけてこんだ。

だがなあ、家の者は獵師の顔をみたたん、

「キヤーツ！天狗様。」

と一声さけんだつきりで、腰をぬかしちまつたんだと。

「お、おい、おれだ。天狗なんかじゃねえぞ。おれだ。どうしたつてうんだ。」

獵師には、何のことやらちつともわからん。

「どうした。どうしたんだ。」

を、くりけえすばかり。家の者もワナワナとふるえて坐りこんだだけだつた。

だが、

「よもや……。」

と思つて、裏の池に顔を映した獵師も、おどけてしまった。朱をぬたくりつけたようなまっ赤な顔に、高う伸びた鼻と白いひげをつけた信じられん天狗の形相がそこにあつたと。」

いく日も、いく晩も悩みに悩んだ獵師は、鉄砲をこめかみにあてた。

ズドン！

獵師の息絶えたのはまもなくのこんだつたど。

ちようどそのころだつてうが、この街道を旅の僧が一人通りかかった。

ほうしてこの悲劇を伝え聞いた坊さんは、

「それでは、わしの念力で天狗とかけあつて、悪さをやめるようきとしてみよう。」

と、村の衆のとめるも聞かずに、天狗の滝へでかけたど。

だが、なんとしてもこの滝を出ていつてくれという坊さんの頼みを、したた

かもんの天狗は聞き入れん。

そこで坊さんは、

「ではここでなあ、二人問答しようじゃないか。おまえのだすナゾにわしが負けたら、ここにおつてもいい。だがなあ、おまえが負けたら出ていってくれ。」

ともちかけた。

これには天狗も、

「おもしろい、いいところではない。」

と、勝負をいどんできたと。ほうして天狗は、すぐさまとなったそうだ。

「小足、八足、二足、色紅にして、両眼天に輝くこと日月のごとし！」

坊さんも、息もつかせず、

「蟹！」

と答えて、杖で天狗の鼻をピシヤリとたたき折つた。

「和尚、まいりました。あす朝までには必ずここを去りますゆえ、許していた

だきたい。」

ほうして次の朝、坊さんは天狗の滝まで行ってみた。もう天狗の姿どこにもみえん。祭壇には、天狗の面が一つだけひっくりかえっておった。ふしぎに思つて、滝つぼをのぞつこんでみると、天狗がとびおりて死んどつたそうなの。坊さんは、滝の近くに天狗の墓をつくつて、ねんごろな供養をしてつからに、この村を去つていったつてなあ。

はなし／ 大平

勝山 徳治さん  
勝山はなえさん

へソート

言葉には靈力が宿っているという思想は、古い時代からみられる。いわゆる言霊信仰であるが、民話の世界でも、それを利用して、狐狸の化けの皮をはがし、化けむじなを退治する「化物問答」や発句の後の句が続かないのを苦にして成仏できないでいる和尚の靈を、小僧が詠んで落ちつかせる話など数が多い。

有名な「ズイトン坊」や「大工と鬼六」などもこの類であるが、この話はそのうち「蟹問答」と分類されるものである。埼玉、山梨、石川、熊本県天草などにみられる。狂言に「蟹山伏」などもあり、古い話であろうと思われる。



ヲ

## 追平のしだれ栗

追平部落の北の山、追平のお堂から二里半ちかく入ったところに、枝のぜんぶ  
しだれた、「しだれ栗」の木がある。

むかしは、三本あったつてうが、今じゃあ一本しかだ。  
この栗の木に二つの話が伝わつとる。

(その一) . . . .

むかし。



弘法大師こうぼうたいしが、ここをおどおりになつたとき、ここにさしていかれたのが、根ねづいたんだそうだ。こここのところんどこは、わきで水みずがでるとこだつたで、その目めじるしにされたんだと。

だが、そり（それ）よを、逆さかさにさしてしまつたんで、枝えだが下向したむきにしだれたんだと伝つたわつとるよ。

(その二) . . . . .

やつぱしこの同じ木おなについての話はなしだが、ほかのいい伝つたえでは……。

あるとき。

はらをへらした諸国行脚しよこくあんぎやの坊さんぼうさんが、このあたりをとおりかかつた。長の旅ながのたびで、くたくたにつかれはて、食くいもんも、ながい間まとつていなんだせえが、ず（じゆ）ず（ずなり）なりの栗くりの木きの下したに立たつても、木きにのぼつてそ（その栗の実をころ）いつをとる元氣げんきもなかつた。

ほいで、坊さんは、木の下でいつしんに、お経をとなえはじめたつてさ。

ほうしたら、ふしぎなことに、三本の栗の木の枝は、すーつと下へたれはじ

めたつてうじやんか。

枝がしたむきにたれさがつたんで、やすやすと、栗の実をもぎとることのできた坊さんは、そいつで、飢えをしのげたというこんだ。

あとでわかつたことだが、この偉大な力をもつた坊さんさ、あの弘法大師さまだつたという話だね。

はなし／ 黒川渡 齊藤 安江さん

へノート

当然上空に向つてのびていくはずの枝が、逆に下向きになつてゐる植物の話は、弘法大師や西行法師、親鸞上人、源頼朝、武田信玄伝説と結びついて語られることが多い。それらの人々の霊験のあらたかさや超能力を物語るための媒介物としての存在である。

小泉郡丸子町西内平井のしだれ栗は、栗の実をはしがる子どもたちのために、弘法大師が、枝をたわめて実をとらせて以来、しだれているという。先の「川浦の弘法清水」と同じモチーフをもつ伝説である。



また、下伊那郡大鹿村鹿塩入沢井にある観音堂のさかさ銀杏は、今では太さ八メートルをこす大木だというが、弘法大師のさしていった杖が芽ぶいたものだと言えられる。ここにあげた(その一)の話と同一である。



勝山さまの鞍かけ石



むがしのことだつてなあ。

おおびら 大平の正高まさたかさま（正高さん、人名）の家に、勝山かつやまさま  
というえらい殿どのさまが、何をなにし  
にきただか（のたかき）さ、泊とまりにきたつて  
なあ。

勝山かつやまさまは、あんまり馬うまによ  
く乗のれんでなあ。正高まさたかさまの家の  
隣となりの京太郎きやうたろうさまの先祖せんぞが教おせてやつ  
ただつてさ。

二軒(けん)の家のあいさ(あいだ)に、ちようどぐええ(真金)のいい石(いし)があつたもんだで、勝山様はその日(ひ)からせつせと、その石(いし)に鞍(くら)をのせて、練習(れんしゆ)したつてき。ほれ、あつこにあるじやねえか。あの石(いし)だ。ちようどいい格好(かっこう)してゐる(してゐる)ずら。

いく日(にち)かたつと、勝山さまは、こんなことをいいはじめた。

「石ではつまらん(う)。ほんものの馬(うま)に乗りた(い)ぞ。」

そんなことをいつたど。

そこで正高(ただたか)の先祖(せんぞ)は、そいじ(それでは)やあ、京太郎(きやうたろう)の畑(はたけ)をかりてやろうつて考(かんが)えた。ほれ、その下(した)に、広い畑(ひろ)が見える(み)ずら。あす(あす)こだ。

正高(ただたか)の先祖(せんぞ)は、勝山(かつやま)さまを畑(はたけ)へつれてつて、馬(うま)に乗(の)したま(ま)ま、家(うち)に帰(かえ)つたど。

正高(ただたか)が家(うち)に入(い)つて間(ま)もなく、ドタドタ(た)と勝山(かつやま)さまは倒(たお)れこんできた。なんと、まだ訓練(くんれん)が足(た)らんで、馬(うま)にはねつとばされてしまつたんだと。

勝山(かつやま)さまは、また、石(いし)の上(うへ)でいく日(にち)もいく日(にち)も練習(れんしゆ)し、どうどう乗馬(じやうば)の名手(めいしゆ)

といわれるまでに上達じょうたつしたんだと。だだからで、そのお礼れいに、正高ただかみさんの家にも、京太郎きやうたろうさんの家にも「勝山」っていう苗字なまじを与あたえてくれただっというわね。

はなし／ 大平

勝山 徳治さん  
勝山はなえさん

〈フット〉

大平部落の開祖とされる勝山家まつわる姓名起源伝説。現在も大平部落は全戸勝山姓で、乗馬を練習したという格好の石もとのままに残っている。



7

# 石の伝説

## 二話

### (その一)

ばけ石いしつていうだ。むがしは、その石の上うえに（大きい）でつかい古ふるだぬきが（いて）おつて、そいで人ひとを（なましたものだ）たましたむんだ。

それ、大きい石いしが道みちの上（あつたなまが）にあつた（い）すが、それがばけ石だ。そこへいぐと、古ふるだぬきが人間にんげんにばけたり、いろんなもんにはけたりして、そこらつれてあ（す）いたりするだ。

高さたかが九尺しやく、幅はばが十尺じゆくもある（約3メートル）でつかい石いしだわね。

まあ、古ふるだぬきが、そのそばに巢すを（作って）こせて、人ひとを（ことだらうよ）たましたつてことずらい。



(その二)

大尾沢(おびさわ)のベタ石(いし)つて話(はなし)は、知ら(し)んだか。それは、

この上(うへ)の方にやっばし沢(さわ)があつてなあ、そこにうーんと(たまじ)でつかい石(いし)があるだ。

むがし(む)、うんと(たいへん)悪いことした連中(れんちゆう)が逃(に)げてきとつてなあ。その石(いし)の下(した)あたり

で歌(うた)うたつたり、でつか騒(さわ)ぎしとつたつてき。ほうしたら(ほうしたら)、その石(いし)が時(とき)をみは

からつてひつくり(ひつくりかえつてき)けえつてき。ベツタン(べつたん)てなあ。ほいで(それで)悪(わる)者(もん)たちやあ、その石(いし)

の下(した)になつて死(し)んじまつたつてうわ。石(いし)だつて、ちやあんとみとつてなあ、悪(わる)

さをこらしめたつてこと(ことだらうなあ)ずらいなあ。

ベタツとひつくり(ひつくりかえつたから)けつたで、ベタ石(べたいし)つていうだよ。

はなし／古宿 小林 賛吾さん



〈フート〉

石に関する伝説も、県下各地には数知れず残されている。擬人化され、意志をもって動くかのようにいわれている石も多く伝えられているが、この話では、悪人を退治したと伝わっていたところなど、どこか説話めいたふん囲気がただよっている。



柏木かしわざのあみださま

む(世)がし。

追平おいびら部落ぼくらくをはるかにみおろす峠とうげに、古ふるぼけたお堂どうがたつておつた。

そのじ(ころ)ぶん、この柏木かしわざのあみだ堂どうのまえは、鎌倉かまくら街道かいどうで、峠とうげごしの旅人たびびと衆しゆうでにぎわつとつたとい(ていたとい)う。

また、このお堂どうも、村むらの五社ごしゃ七堂しちどうのひとつとされとつて、ありが(ありがた)てえ堂どうだつた。お堂どうは小ちいさいが、本尊ほんぞんさまがまた格別かくべつだ。く(確)らいお堂どうのなかでだつて、黄こん色じきに光ひかりかがやく、金さんのあみださまなんだと。

このご本尊ほんぞんには、ふしぎな話はなしが伝つたわつとる。

あるとき、ここを通つた旅のあきんどが、一夜のかりの宿を、この堂でとつた。

ところが、ここでひと晩すごすうち、このあみださまにめをつけたあきんどは、

「おつ、こりやあ、よくできとるあみだじゃ。キラツキラツと光つとるわい。

金でできとるにちげえねえ。たけもちつこくて、持つてくにもらくじゃ。松本

の市へでももつてつて売つてみる、しこたまな錢になるわ。こんな山んなかで、

かせぎができるたあ、これも仏のおぼしめしつてもんか。しめしめ。」

と、あくる朝、ふろしきにこの仏さまをこつそりしのばせて、なにくわぬか

おで、堂をでた。

だが、二・三町も歩かねえうちに、背中の荷が、じわじわ、ずしんずしんと、

重たくなつてきた。

「おかしいなあ。しよいだしたときには、こげん重い荷じゃなかつたんじゃが

.....」  
と思つとるうちに、(こんどは) こんだは、(てあし) 手足が、びりんびりんとしびれてきて、どうにも歩けねえ。

その場へ、へなへなつと、(すわ) 坐り(こんでしまつた) こんじまつた。

「おかしいぞ。へんだぞ。こりやあ、あみださまを(ぬす)盗みだしたせえ(ため)かもしれん。」  
と、思いあつた旅人は、ひろつた木の枝(えだ)つえにして、(はいする) 這えざるように、お堂まで(ひきかえした) ひきけえした。

「あみださま、(もうし) 申しわけございませぬ。もうふたたび、こんな気は(き)おこしません(から)さけえ、(たす) お助けを……」

と、(なみだ) 涙ながらに(いの) 祈りおわらんうちに、(てあし) 手足のしびれは、まるで、うそのように、とれちまつたんだと。

はなし／ 川浦

奥原喜運治さん

へノート↓

柏木のお堂は、追平部落の今の県道より一〇キロほど上ったところにある、この話の仏像は、今はよそに移して安置してある。

伝説の中の神や仏は、大神社や大寺には置かれず、村はずれのささやかなお堂や山中のほこらにまつられていることが多い。あるいは、道の辺に野ざらしになっている場合もみられる。そして、いつもは、ひっそりと控えめにたたずみながら、大事に至っては、あらたかな効験を発揮したり、人をいさめたりするのである。神や仏をつねに自らの生活の中に住まわせ、いつも身近かな靈験を期待しようと考えているのであって、ここに、昔の人々の神仏に対する理想像をみる思いがする。



## 小沢寺の話

小沢寺も、むかし、うんとおおきい寺だった。

ところがあるとき、住職の失火で、ぜんぶ焼けてしまった。

旦那家の人々にもうしわけないと、わが身をせめた住職は、門前にたて札をだしてから、生きうずめになった。

「すべてが、私の失敗です。かくなるうえは、わが身をも亡ぼして、皆さんにおわびするより法は、ありません。ここに塚をほつて、生きながら地下にはいます。わたしのたたく鐘の音がきこえなくなったら、命が絶えたものと思つてください……………」

しかし、ふしぎなことに、鐘の音は、いつまでも絶えることがない。

それからずーっと、今でも、この塚で耳をすますと、住職がたたくまんまの鐘の音が、チンチン、チンチンと、かすかにきこえるのだそうだ。

はなし／ 黒川渡 鈴木 義道さん

〈フート〉

いわゆる六部塚伝説のうち、入定伝説系の話。

自ら生きうめになり成仏したと伝えられる僧や行者、比丘尼や六部の塚は、全国的に数多く、それらのほとんどが、そういう人々の墓として伝えられている。

しかし、これは学問的にはほとんど意味がないという。塚の実際は、もつと実用的な価値をもち、田畑や隣村との境界であったり、祭壇や祭場であったり、念仏供養のための盛り土であったりする。そして信仰と関わりをもつ塚では、その主宰者が、僧や行者や六部なのである。そこに、後から伝説がつけられ、主宰者を主人公として語り継がれていく。この話なども、そういった経過をたどって、つくりあげられたものであろう。

しかしいずれにしろ、塚が聖地として認められていることには、かわりなく、みだりに手をつけてはならないというタブーは、守られている。





むじなに化かされて死んだ先生

これは、ふんどうにあつた話だ。

むがし。といつても明治のころだが、黒川渡の学校に、山田金吉郎つていう先生がおつた。

そのころは、ここはまだ西筑摩だつたもんだで、先生たちの会は、木曾までいったわけだ。境峠を越してき。

ある大雪の晩。うんと寒いときだつていうがさ。

やつぱし、金吉郎先生も木曾で会が終つて、境峠越すじぶんによあ、へえ、暗くなつちまつたつてき。会で一杯やつてきよつたもんで、きつとほろよい気分だつたら。峠の頂上あたりで、へえ家へついたような氣になつたつてき。



「ああ、やつとついた。山道やまみちをいそいだもんだで、あつあつついわい。」

つてなわけで、着物きものをありつたけ脱ぬいで、えもんかけにひっかけて、

「それでも冬ふゆだで、足あしだけでも、コダツへ入れいれずいい……。」

それでぐつすり寝ねこんじまつたつて。

次の日つぎがあけても、先生せんせいは帰かえつてこない。村むらじゅう大騒おおさわぎで、総出そうしゅつで探さがした

ら……。山田先生やまだせんせいは、境峠（頂上）のいたいたたきで死しんでおおつた。着物きものはみんな脱ぬいで、

木の枝えだにひっかけて、足あしは水みづん（水の中）なかへつつつつここんで、ねむむつたままんんまで死しんんどどつ

た。

村むらの衆しゅうは、みんな言いつつたたんんね。

「ありやあ、むじむじななに化くかさされて死しんだだわ。それでなきやあ、あんなバカバカみ

て（たい）ええな死しに様さまはし（ない）ねえ。」

つて。

山田先生やまだせんせいのお墓はかは、奈川渡ながわたりにちゃんどある。ふん（ほんどの）どどううの話はなしだ。

〈フート〉

むじなは、アナグマの異称。「和名抄」しかし、北信ではその通りあなぐまのことをいうが、中南信では、たぬきに近い動物とみられている。奈川村でもたぬきとほとんど一致する。

ここでは、化かされた当事者が、化かされたまま死んでいる。この話は、その異形の死に様からまわりの人々が想像して作りあげたものでありながら、その墓が現存している点などはリアルでもある。明治三十六年冬の話だ。

龍宮淵

奈川村神谷部落を流れる川が、そのしたの寄合渡部落に流れこむあたりに、  
むがし、龍宮淵とよばれる、ふかくすみきつたよどみがあった。

なんでも、この淵のそつこは、龍宮城にまでつづいてたつてことだ。

だて、この淵には、乙姫さまが、すんどつた。

まいとし土用になると、東がわの岸のうえにあるサワラの大木から、むかい  
の岸の「鼻のあな岩」まで、川をまつたいでなわをはり、それにいろどりの乙  
姫のころもを、ずらーつとかけならべて、土用干しをしたむんだつてなあ。

また、人集まりがあつて、おせんやおわんがほしいときにやあ、そのまえの

晩ばんに、いるだけの数かずを書いて、淵（へい）いれておく。そうしりやあ、つぎの朝あさ、淵（へい）のはじつこに、ポツカリとぜんぶそろして、出だしてくれてあるというんだ。嫁よめ入りの着物きものをかりたけりや、そいつも一式いっしきかしてくれたつてき。

部落しやうの衆しゆうは、うんと重宝ちゆうほうしたむんだつてうが、ある者もんが、かりたおせんおせんの脚あし

を一本いっぽんいためたちまった。だが、

「まあよからず。これ（このくらゐ）つくれの傷きずな

らわかりつこねえ。このまんま、返かえ

しちまえ。」

と、ずる決めきまこんで、そのまんま、

淵（へい）へもどしたつてう。

するとそれから、いつくら、どんね（どんねに）にたのんでも、かしてくれなくなつち

まった。

そんな（そんなことで）こんで、気持きもちちを痛いためた乙姫おとぎは、その後ご、この淵（へい）にいることをきらつ



て川をくだり、島々の宿の入り口に今ものこる、おおきい淵にすむようになつたんだと。

そこを、島々の衆は、龍宮淵といつておる。

はなし／ 神谷 奥原長左衛門さん

ヘノート

「浦島伝説」は、『万葉集』の古い昔から文献にあらわれ、『日本書紀』、『丹後風土記』などにもみられる大伝説。室町時代の『御伽草子』で、まとまった物語として紹介され、一躍一般に知られるようになった。

それだけに、「浦島太郎」「どうどうが淵」「龍宮淵」などという名で、その発祥の地も、長野・山梨・岐阜・兵庫・福井など各地に分布する。この近辺では、木曾の寝覚の床に伝わる話が有名。

奈川の話は、浦島太郎の登場する部分が欠落しているものの、これも分布の多い「貸櫛伝説」とミックスされ、貸してくれるものも嫁入衣装一式などが加わっている。土用干しされた羽衣を貸してくれるのだろうかなどと連想されて、楽しく美しい話である。

いずれこの種の話は、海の彼方の常世国とよばれる仙境が生命・豊饒の源であると考えられる古代の人々の、素朴で空想的な異郷信仰から生まれたものであらう。

寄合渡獅子舞縁起

むがし、<sup>(昔)</sup>神谷部落に、横井さんて若者がおつた。

横井さんは、一人で苦勞して働いて、神谷にお宮を作つただ。そのお宮は、「神谷公園」つてよばれてるんだがね。そのころ、この村じゃあ、このお宮が一番いいとこだつたそうだ。

横井さんは、ある日、何か考えこんでたど。それはこのお宮で(盛大な)つかいお祭りやろうつてことだつた。

そしてそれには獅子舞をやるが(良いだろう)よかろうつて思ひあつた横井さんは、一人、野麦峠を越えて飛驒に入り、高山市まで行つたど。

高山の獅子舞を二年かけて習つた横井さんはなあ、村に帰つてにも、家にと



じこもりつきりで、毎日獅子舞をやつとつた。それから、親せきや知りあいの人を集めて、獅子舞を教えただ。

横井さんの努力はむくわれて、やつと神谷で獅子舞をやることになつたけど、神谷にや若い衆がなくなつちまつたむんだで、隣の寄合渡へもつてきて、寄合渡のお宮でやることになつただつてわ。

それが今でも続いとるつてわけせ。

はなし／ 神谷 奥原長左衛門さん

寄合渡 奥原 樹男さん

ヘノート

現在でも寄合渡の秋祭りには獅子舞が奉納されるが、その縁起話である。時代的な古さは語られていないのではっきりしないが、この話のように獅子舞を飛騨からもつてきたという説と富山から仕入れてきたという説との二説を聞くことができた。いずれにしろ、かつての海産物などの流入ルートと重り合っているのので、そういう商人らの運んできた芸能であろうとも考えられる。

## 大男の話

むがし。それも、いつだかわからんむがしだがなあ。

この村に、そりやあ、とてつもなくでつけえ大男がすんどつた。

この川浦のちよいとさきいいた、野麦峠いのぼつていく道ばたに、その大男が手をついた大岩がある。

かたい大岩に、ちやあんど、五本の指をついたあとが、へこんでのこつとる。

あんなでつけえ石を、ひつつかんで、どこいもつていかつとしたむんだか、ど

つかからもつてきてあすこい置いたむんだか……。知らんけんども、とにかく

ある。

木曾の藪原いぬける境峠にやあ、その男のでつけえ足跡が、しっかりあるつ

てし、この奥おくい、一里いちりはかのぼったところにも、やっぱり大男の足跡がある。  
一尺いっしやくから尺五寸せきごすんもある、てけえあとたたで、ふんとふんとにおったむんだわな、むが  
しは。

はなし / 川浦

奥原喜運治さん



へノート↓

杣人や獵師の中には、今でも、「山人」とか「山男」、「ぐりん様」などとよぶ大男が山に住むことを信じ、恐れあがめる人々がいる。

奈川村では、直接は聞けなかったが、この信州に住んでいた途方もなくでかい男は、「でいらんぼう」、「でいだらぼっち」、「大きいぼっちや」などといわれる。浅間山と碓氷峠の間に住み、すわると、一里四方が尻の下、立つと、頭は雲の上にてたという。

八ヶ岳の峰をけちらして八つのでこぼこを造ったり、塩田平と佐久平を開いたり、大昔は海だったという松本平の塞きを切って海水を流し、肥沃な地にしたのも彼だという。

壮大な創世伝説が信州各地に伝承され、でいらんぼうの尻の跡や足の跡、もっここかついて造った山などが、小県、佐久、諏訪、伊那、安曇、木曾などにいくつも残されている。

大地と水を自由に泊めようとした古代人の素朴な夢と願いが、雄大なスケールの伝説を語り伝え、神話に近い形式で口承されているのである。

乗鞍へのぼったいわな(のりくら)  
乗鞍へのぼったいわな(岩倉)

ほれ、(それ)じきそのの「いわな淵」(すじ)つてどこに、むがし、(昔)でつかいいわなの主が  
(いたからねえ)おつたでなあ。

そのいわなの主がなあ、乗鞍までのぼつていつたつていうだよ。山道をのぼ  
つていつたつたつてき。(のだ)水のねえ道だでなあ。魚の格好じやあいけねえで、(行くことができないから)蛇体  
にでもなつていつたもんずらいなあ。(ものだらうなあ)

その山道にひととこ、(一か所)清水がでるところがあるだが、そこがいわなの休んだと  
こだつてき。(そうしたら)ほうしたら、水がわきでただつてわ。(それだから)だで、そこを「いわな清水」  
なんてもいうだよ……。

ああ、「いわな淵」か。おら子どもの時分にやあ、でつかく青いふちだつたが、

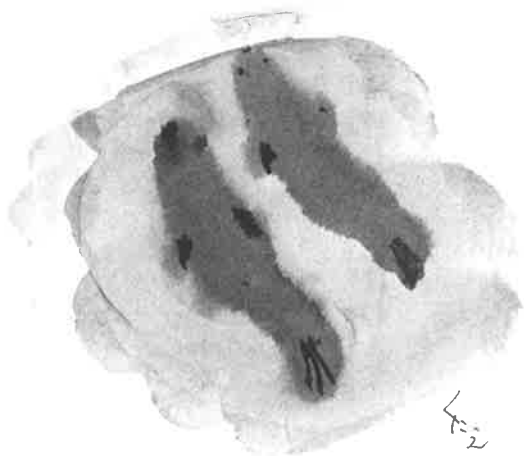
今はまるであせちまつて、淵らしくもねえなあ。  
(水が少なくなってしまうと)

はなし / 川浦

奥原喜運治さん

へノート

川の主としておもなものは蛇であるが、  
時として大鯉になったり大岩魚になったり  
もする。この話でも、大岩魚が蛇の姿に変  
化して、山道をのぼるなど、その両者をミ  
ックスした型の話である。いずれにしろ、  
大地の精霊を信奉する思想から生まれた話  
であることは変りない。



きつねに化かされた話

夕方ゆがただったなあ。寄合渡よりあひどについた  
とき(には)にやあ、五時じをまわっていた(だ)ず  
らろうかららで。

きつねやむじなは、(夕方の早い時分、一の暮れ)  
出でるつてでなあ。  
いちのくれに

木曾きその開田かいたで、(さまじごと(やっていた)  
柚仕事ゆずしごとやつとつた

(ものだから) むんだで、(鬼して) 境峠さかいとうげをこして帰かえってきた。そのときにやあ、夕ゆの干物ひしろのひらべつ  
たくて、(大きい) でつけえやつをむら(もつて)つてかっいできただよ。こうもりの柄えにひっかけ  
て、三枚まいだ(だまう)つたずらいなあ。



「ほそじま」つてところが、あつちのおりつきで、茶店があつてき、そこで休んだ。ほうしたら、そのうちに、へんな気分になつてきた。

「なんずら、へんでこだぞ。さぶいような、さむしいような、おかしい気がするなあ。頭もぼうつとしてきたし……。」

と、思つたけれども、

「しかし、こんなバカなことはねえ。」

と、思いなおして、茶店をたつて、ずんずん峠をのぼつてきただ。

すると、峠のじきしたのところでさあ、ふいつと顔をあげると、十間ばかりに、うつつくしい女が手ぬぐいをかぶつてるわけだよ。

「おかしいわなあ、茶屋で休んだときにだつて、あんねにいい女はきていなんだし……。」

と、思つとるうちに、すうつと消えちまつたんだ。おらもなんだか、すうつと、そらつきぶしいような氣になつてきてき。



「そうか。さつき茶屋で、うんぼらさぶしいような氣になつた。そのときから、なにかにだまされてたつ（たどいう）つうわけだわな。きつねかいなあ。きつねは、いい女に化けるつて（まうから）そうで。」

それなら……と思つて歩きはじめたが、こんだは、おれの後のほう（あと）からなんかがついてくる。こうもりがさにひつかけたタラが、ときどき重（おし）たくなつて、パタンパタンと音（おと）するだよ。

「こんなバカなこたあ、（こたは）ありつこねえ。こんちきしよう。（あらはずがない）」  
つて、おれは、山（やま）だつて坂（さか）だつてわからねえ、とびつとおしで寄合渡（よりあひど）まで帰（かえ）つてきただ。

ほうしてなあ、荷（に）をおろしてみたら、おどけたぞ。（びつくりしたぞ）  
タラの干物は、一枚もねえんだ。みんなとられちまつて。きつとやつは、魚（さかな）をほしくつて（欲しくて）  
おれを化かしといてさ。

寄合渡（よりあひど）までついてきただな。きつねつてやつは、おつかねえむんだぞ。（恐ろしいものだぞ）

へノート

狐は狸とやらんで、人をだまし、病気にさせ、また姿をかえて化けるものと考えられている。

その話も大小、全国いたるところで聞けるが、その大部分は現存者の体験談として話される。現代人でさえも、神秘的動物として把握していることを示しているのである。そしてこの無気味な魔性が、狐つきや狐火の俗信を生み、稲荷信仰へと発展していく。

狐に化かされたという話は、すでに室町時代の『御伽草子』でさかんに語られている。ここでは、まんじゅうや思って食べた馬糞だった話、肥溜を風呂呂と思つて気持ちよさそうにはいっていた話、木の葉が黄金になる話など、どこかユーモラスで茶目つきの感じられる悪戯となっている。

また、そのきれ長の目もと、華奢な容姿、執念深いその心などが女性のそれと似ているところから、大体は、美しい女の化身となつて人を誘うところが共通している。ここにあげた話も、素朴なモチーフの残された話で、山住みの人々のいかにもどかな、野の動植物と交流ある生活の姿を感じとることができる。

むじなとちようちん

こいつも、木曾の開田のほうから帰ってくるよきの話だ。

仕事しまつて酒はのんだし、へえ夜半の十二時すぎてるつてんで、村の衆は  
とまつてけつてとめたが、

「慣れた道だし、あんじやねえさ。一里ちよいとむこうだて帰るぞい。」

つて、ちようちんつけてきただが、雨はしよぼしよぼ降ってくるし……そいでやつぱし、むじなつてやつがついてただわなあ。

やたらへんでこな風アドワドワツと吹いて、



何かすれちがったと思つたらすれちがいざまにちようちんへとびつついてきたわな。そうしると、ポカンと火が消えちまつて、ちようちんのろうそく、みんなとられちまつてるだよ。

またすこしいくと、ポカンと消えちまう。……何本とられたただか。……そのうちにやつと離れただかな。

むじなつてやつは、ろうが好きだつていうし、ほれ、むじなのちようちんていうじゃねえか。ああやつて集めたらうを使うだすらいなあ。

はなし／ 川浦

奥原喜運治さん

桃ししの木と相撲すもう

ふんにおおふくろのおやじが経験けいけんした話はなしだつてうがね。(い)

じじは、晩ばんにこのうえの道みちを歩あつていただつてき。すこし酔よつてバカになつてたつてが。そうしたらむこうから、なんかぼうつとしたかたまり(の)みてえなもんがとびつついてきたつて。

じ(番)じ(さん)さおどけて酔(おどろいて)いもさめたつてわな。

その変(へん)なもんは、じ(さん)じ(さん)の耳(みみ)もとで、

「おい、じじ。心配(しんぱい)するな。おれ(おれど)とすもうとれや。」

つていうつてき。そうしてぎつちりとどつついてはなれねえだよ。じじもかんねんして、とつくみあいをはじめたつてうがね。(い)

組みあつてみると、やろうなかなか強  
くてさ。組みつついて離すと、ずうつと  
むこうへいくわけさ。逃げるわけ。だが、  
すぐにピシヤツとかえってくるだよ。そ  
れで、じじがつきとばされるわけ。

（それであ）  
そんでまあ、長い時間組んだらしいだ  
よ。しまいにやじじは、てぬぐいひつか  
けて、引いたり押ししたりしたらしいがね。  
（そんなことしてらうちに）  
そんなつしてらうちに、夜があけてき  
た。気がついたときには、じじそこで寝  
ていたらしいがね。

「おや、これはいけね。さふいなあ。」  
（まいなあ）  
と思つて見回すと、じじの寝ていると



こは、桃ももの木きの根ねつこでき。小ちひさい枝えだなんか、めちやくちやにおし（折れてしまつて）よれちまつて（いるといふことすま）いるつてせ。

じつき、一晚ひとばんじゅう中桃なかつももの木きとすもうとつてたわけだ。木きの枝えだだむんだで、ひつぱつて離はなしゃあ「ピシャリッ」とけえつてくるわけさなあ。（だよなあ）

だがじじは、桃ももの木きだなんてちつとも氣（気がつかなかったというから）いつかなんだつてで、むじなにでも化（いたのだらうなあ）かされていたずらいなあ。

はなし／川浦 奥原 幸男さん

ヘノート

「むじなのちようちん」とか「むじなの嫁入り行列」といった話も各地に伝えられ、多くのむじなが点々とちようちんの灯をゆらしながら行く様相は一幅の絵をみるようで楽しいが、この「むじなとちようちん」では、種にするロウを入手する法をせんさくしている点が特異である。

また「桃の木と相撲」はおそらく酒の勢いによるものであろうが、それもむじなに転化されていく。意識のもうろうとした中で行われる不可思議な行為は、ほとんどが身近かな狐狸やむじなに向けられていく。彼らにとつては迷惑千万なことなのであろうが、またここにこれら自然界の動物との密な心の行き交いを見ることができるといえる。

たいこの皮は山犬の皮

このすこし下の、岩にセメントをふきつけしてある、あのぐるわの沢に、よく山犬がでただよ。

ある時。

どこの人か知らねが、黒川の方から登ってきたら、あの辺から山犬が追ってきたつてき。おくりおおかみつてやつずらいなあ。

山犬つてもんは、うしろをふりむくと、「パツ」と頭へとびかかつて襲うでね。ほいでその人は、ちようどカラカサもつてたむんで、そいつを開いて、頭を中へつつこんで、ふりむきざま「サツ」と刀をぬいて、「ザクツ」と切りつけた。山犬あとびかかつてきたむんで、うめえぐあいに、腹あザツとさけて、一刀で



退治たいじできた。

その山犬かむの皮が、今いまのおら方（川浦の）はの部落ぶらつのたいこの皮だつて。だ（だから）で、古ふるいもんだ  
わねえ。

はなし／ 川浦 奥原 幸男さん

ヘノート

山犬は、山野にいた野生の犬で、しばしばオオカミと同じもののように考えられている。やや陰性でしかも敏捷、凶暴性を備えているため、山里の人々には最も怖れられている。また山の神（山）の神の使いともいわれ、そのお姿で獣害を防いだりする。秩父三峰神社、遠江山住神社などで行なわれている。

牛方うしかたと青魂あおだま

どどこかつかの牛方うしかたが、牛を二頭追どうおつてな。夜おそく道みちを歩あるいてたつてわ。

ほう(そうしたら)したたら、その牛方の前まえを青い玉あおたまがぼかんぼかんといぐだつて。それからその青い玉が、どつかそこらの家うちへへつてつたつて。ほ(それだものだから)いだもんで、牛方がその家へへつていつてみたら、寝ねてた人ひとが目をさましてな、

「おおつ、おらあ今いま、うんとおつかねえ夢ゆめみとつたところだわ。」  
つていう。

「いつたいどんな夢ゆめだい。」

「おらあ今いまなあ、牛にどんどんまく(遠いかけられてなあ)られてな、いっしょうけんめに逃にげただよ。だが、足あし(は)あふわんふわんしてちつとも進すす(まないし)まねし、牛あどこまでもひ(くっついて)ついでく



るだ。うんとやだ夢(嫌な)みとつただよ。(みておっただよ)

青玉あおたまつてのは、人の魂ひとたましだつていうでなあ。その寝とつた人の魂が抜ぬけてでてさ、そいつが牛方の前まえをゆれていったもんだで、まくられとるように思おつたつてこ  
んず(ことだらうねえ)らいなあ。

はなし／川浦 奥原喜運治さん

へノート

人の霊ばかりでなく、動物や植物などの霊が生体から離れて行動するという観念は、多くの民族の間でみとめられる。そしてそれが、物の怪もののけとなつて人に取りつくモチーフは、「源氏物語」などで有名であるが、この話ではもつと素朴な形で、霊が遊泳し、またもとの体にもどつていつている。

また、ここに牛方が登場してくるのは、この村がかつては牛方の村として尾張藩の特別な鑑札を受け、「尾州岡舟」の名のもとに、中部、東国の津々浦々で勢力をふるつた背景と関係があらうと思われる。

## 比丘尼の墓

ここから一里(4キロくらい)はかうえかいなあ。ほれ、野麦(のむぎ)へいく途中(とちゆう)の道端(みちばた)に、ちいさい墓(はか)がぽつんとたつとる(たつ)ずら。ありやあ、比丘墓(びくはか)つていつてなあ、古い言(い)い伝(つた)えが残(のこ)つとるんだ。

比丘尼(びく)つてのは、仏道(ぶつどう)を修業(しゆぎよう)して諸国(しよこく)歩いてる尼僧(にそう)のこんだが、ある時(とき)、飛驒(ひで)から峠(とうげ)越(こ)えてきた若い比丘尼(びく)がおつた。

寒中(かんちゆう)で、しかも吹き降り(ふきふり)の雪(ゆき)ん中(なか)、信心(しんじん)だけの精神(せいしん)力で越(こ)えたんだが、精魂(せいこん)つきてあすこで行(い)き倒(た)れちまつたんだわなあ。

それを、川浦(かうら)の衆(しゆう)がみつけただが、比丘尼(びく)はなけなしの銭(ぜに)をもつてただつて(いたのだとき)。気の毒(どく)に思(おも)つた川浦部落(かうらぶつ)の衆(しゆう)が、供養(くよう)のために、その銭(ぜに)で(石を利んぎ)つてあげたお

墓<sup>はか</sup>だつてわなあ。比丘尼の墓<sup>はか</sup>つていうだよ。

はなし／川浦 奥原喜運治さん

〈ノート〉

比丘尼塚、比丘尼墓と伝えられる遺跡は、県下に多い。

この話では、雪中行き倒れて死んだ比丘尼への、その部落の人々の供養心が美談として伝えられている。

他地方では、婚礼の行列は、比丘尼塚をさけて通るなどの習俗がみられるが、この村では聞きだせなかった。



奈川民謡





## 奈川 追分（祝歌）

〱目出度目出度の 若松さまは  
枝もさかゆる 葉も茂る

〱酒の肴は 醬油のみでも  
鯉の刺身と おもってくう

〱飲めやうたえや 今宵を限り  
明日は互いの 離山

〱くるかくるかと待つ夜はこない  
待たぬ夜はきて 門に立つ

〱目出度座敷の その真中で  
鶴と亀とが 舞い遊ぶ

〱酒はよいもの 気を勇ませて  
顔に五色の 艶を出す

〱親父大黒 かかさは恵比寿

ござるお客（お嫁）は福の神

〱あなた百まで わしや九十九まで

共に白髪の 生えるまで



# 奈川はちまん

へぐじよの八幡 出てくるときはサヨイ

雨も降らぬに 袖しぼる

袖しぼる 雨も降らぬに 袖しぼる (返し)

へ昔馴染みと 八幡ぶしは

捨てと思えど 捨てられぬ

へ松の小枝に くるみを植えて

松(待つ)に くるみ(来る身)のうれしきよ

へ心変わるな 世は変われども

梅は桜に 変わるども

へ立てばしゃくやく 坐れば牡丹

歩く姿は 百合の花

へ月をまねきし すゝきでさえも

今じゃ刈られて 炭俵

## 奈川 臼 ひきぶし

〽臼の軽さよ 相手のよさよ  
相手変るなノー 明日の夜もハアキタサア

〽臼をひきゃこそ あなたのをそばで  
間に見るばか 思うばか

〽信州信濃の新そばよりも  
わたしやまきの そばがよい

〽臼はひけども 焼餅くれぬ  
姿々さしわいか 粉ないか

〽臼をひくときゃ きがねのやまで  
ひいてしまえば 棒まくり

〽秋が来たとして 鹿さえなくに  
何でもみじが 色づかぬ

〽おなじそばなら 奈川のそばと  
いとしいあなたの そばがよい



## 奈川かやぶき

へかやぶきやヨ かやだとおっしやる  
かやでないのが こけらぶき

シヨীগイノー

こけらぶき かやでないのが  
こけらぶき シヨীগイノー

へ誰も踊らにや 俺ら三人で

四角三角 そばなりに

へ音頭とる衆が 橋からおちて

河原よもぎが 音頭とる

へ檜樅の柁目となりて

いとしまきに へがりたい

へ月はまあるく 出て来は来たが

主に会わなきや 真の間

へわたしや奥山 一重の桜

八重に咲く気は さらにない

へ昔なじみと四、五年ぶりて

こよいおにはで あいおんど

へ草を刈るなら 桔梗ばかりるな

桔梗女子の 縁の花

へ今宵一夜は 浦島太郎

明けて悔しや 玉手箱

へ盆にやおいでよ お正月来でも

死んだ仏も 盆にや来る

奈川えささ踊

へえささ踊りは 足拍子手拍子  
三拍子揃わにや 踊られぬ

へ姉はきり鳥 妹はさつき  
末の妹は百合の花

へ知らぬ顔して おしやくにでたが  
胸にやいいたいことばかり

へ声はすれども 姿は見えぬ  
様は草葉のきりぎりす

へえささ踊りを 身に泌みこめば  
踊りやめまい 夜明けまで

へさいた桜に なぜ駒つなく  
駒が勇めば 花が散る

へ盆が来たかよ お寺の庭で  
いつも大勢の唄の声

へ今の音頭は どなたのだれだ  
鈴の音がする りんりんと

へわたしや奥山 一重のつつじ  
八重に咲くきは さらにない

へ思い出すよじや ほれよがうすい  
思い出さずに 忘れずに



採  
訪  
日  
記





## 昭和五十二年夏休み

▼昭和五十二年八月一日(月)はれ

野菜や鍋や食器を山のようにかかえこみ、なんともたくましいでたちで、一日二往復しかないバスに乗りこんだのは、みんなんぜみがるさく鳴きわめく夏たけなわの頃だった。私たち文芸クラブ員は、研究課題である「野麦街道の民話」を調査するために、八月一日から三日まで南安壘郡奈川村川浦公民館で合宿を行うことになっていたのだ。「民話」、「野麦」という響きにはのかな郷愁を抱き訪れた村は、素朴なたたずまいをみせていて、乙女チックな気分を助長させた。私たちの宿泊する公民館は、想像していたような傾きかけたほったて小屋なんかではなく、たいそう立派な新しい建物だった。鍋やら食器やら、私たちがみつともない格好で背負ってきたものはほとんど揃っていた。部屋も広くきれいでたいへん居心地のよさそうな所だった。ただ一つ、アブの襲撃のたびにみんなして座ぶとんかかえて逃げ惑ったことを除けば……。

その日の午後は、昼食をとったり買い出しに行ったり、アブを追いかけたりしてはしゃいでいるうちに暮れてしまった。

夕食は二年生の担当で親子丼。肉が腐りかけていたが無視して作った。見ためはきれいだったので、内情を知らない人達は喜んで食べていた。もちろん私たちは親をどけて食べたが……。

夕食後、奥原喜運治さんと奥原ふでさんが来て話をしてくださった。女工さんの話やきつねつきの話を、延々といつ果てるともなく語られた。普段は鬼も恐れぬといったようなたくましいクラブ員も、さすがにきつねつきの話には震えあがってしまった。そのため(というよりはむしろ、修学旅行気分で浮かれていたためといった方が適當だが)その夜はなかなか眠れなかった。

### 八月二日(火)はれ

奈川村の朝は早い。夕べ遅くまで騒ぎ過ぎたせいもあって、七時近くに洗面していた私たちに、「お早うございます」と畑仕事に出かけるおばさんが声をかけた。「あつ!! お早うございます。」気恥かしいような気持ちで言葉を返す。

掃除をするため、ほうきをとりいくと、玄関にきゅうりが積んであった。おそらく、朝一番にもぎとられたものだろう。みずみずしい贈り物に、私たちの心まで潤うようだった。

朝食後、女工さんの歩いた街道に沿って野麦峠まで行く班と、川浦で、カセット片手に民話を採集する班とに分かれ、活動を開始した。私は野麦街道の班に加わり、九時頃公民館を出発する。心も軽く身も軽く、道々まわりの景色に足をとめ、「わあーきれいだ」「きゃあーステキ」と歓声をあげながら行く。「旧道」という道標を目にした時は、私たちが知るはずもない遠い日に、この道を行き来したのであろう女工さんたちの、せつない思いが忍ばれた。旧道は無情なほどに細く、険しく、長く、初めはハイキングのつもりで、浮かれて余裕を見せていた私たちも、「もうヤダ」「歩けん」の言葉を荒い息のかわりにはきだしながら進んだ。当時、深い雪の日に防寒具ももたない女工さんたちは、どんな思いでこの峠を越したことだろう。「雪が襦袢と血で赤く染まった」という状況を想像すると、身に沁みる思いであった。

あたり一面熊笹におおわれた道を、かきわけるようにして登りつめ、ようやく「お助け小屋」に辿り着いた。その名のとおり、まさしく「助かったアー」という感じで、疲れと安堵の入りまじった溜息をつく。ここでこうして、しばしの救いを得た女工さんも少なくなかっただろうと思う。私たちは中でサービスのお茶を飲み、落書き帳に思い思いの感想を書きとめ、それからお助け小屋をバックに、よそ

ゆきの顔で気どって記念撮影をした。その後、再び元気を出して、旧道沿いに帰途についた。

一時半頃公民館着。昼食。午後は三班くらいに分かれて民話の採集をする。「民話の採集？ ふーん、なんとなくるんじゃない？」と高をくくっていたが、口の重いお年寄りから話をひきだすのは、思ったほど容易なことではなかった。「民話ー、民話はありませんか」とちり紙交換式にやったのでは、「そうだねえー」とうなづいたきり口をつぐまれてしまう。そうかといってほかに聞き方を知らない私は初めから終わりまで三年生にまかせっぱなしで、付録のようにそばでかしこまっているだけだった。役に立たないことこの上なく、本当に申し訳なく思った。

公民館にもどって再話をした。うまく聞きとれなくて、何度も何度もテープをもどす。二人寄り三人寄り……みんなでカセットに耳をくつつけるようにして聞いているが、なかなか思うようにいかなかった。

夕食後五、六人のクラブ員は、昼間仲よくなったおばあさんの家へ訪ねていった。おばあさんはいへん喜んで迎えてくださり、若い頃の話や、懐しそうちにくり返しくり返し語ったそうだ。

その夜は、ほうぼう歩き回った疲れのためか、朝まで夢も見ずに、ひたすら眠った。

## 八月三日(水)はれ

早くも合宿最終日。朝食後一息ついてから、昨日聞き残した家を訪ねた。私はまた付録的存在だったが、しどろもどろの口調で聞くと、「そーいや、こーいう話があったわなあ。」といって話し始めた。うれしさに身をのり出して聞き入り、時間のたつのも忘れてしまった。

あわだたしく昼食をとり、かたつけや掃除にとび回った。バスの発車時刻が迫る。これに乗り遅れたら四時間以上も待たなければならぬ。早く早く。せきたてられるようにして停留所に向かった。おばあさんが家の前で見送ってくれていた。バスの発車時刻はもう過ぎていたが、親切な運転手さんが待っていてくださった。私たちは、この暖かな人たちにお礼を言い、一抹のさびしさを残してバスに乗りこんだ。こうして、いつも村の方々に暖かく見守られて、私たちの合宿は無事終了した。



軒先に腰をおろして古老に尋ねる(太平にて)

▼昭和五十三年七月三十一日(月) くもりのち雨

午前九時三十五分新島タバスターミナル発、川浦行。私たちのほかにはほとんど乗る人もない。私たち三年生にとつては最後の合宿である。最高のものにしたいたいという願いとドジを売り物にしているような私たちにできるだろうかという不安が交錯する。一時間ほどバスに揺られていくと、目の前に見覚えのある風景が広がった。奈川村だ。曲がりくねったでこぼこ道も、ブリキ屋根の家々も……去年のままだ。不安がふつとび、懐しさがつのる。バスが川浦に到着した。去年仲良くなったおばあさんが、家の前で迎えてくれた。おばあちゃん、何人かの部員がかけよる。「またお世話になります。」区長さんのお宅へあいさつをして中にはいった。部屋をサーッと掃いてから、懐しさにわいわい騒ぎながら各自持参の昼食をとった。

午後は、三班に分かれて早速調査を開始した。カセットをもって二時間ぐらいあちこち歩き回ったが、みな仕事にでかけていて留守だった。しかたなく公民館にもどり、これからの計画を立てたり、必要な買い物を書き出したり、台所を掃除したりなど、雑事に時間を費した。

五時——。四時頃到着予定の先生がまだみえない。買い物をしてこなければ、食事を作ることもできないのに……。

五時三十分——。しびれをきらし、ありあわせの材料で夕食の準備を始める。六時——。あまり到着が遅いのでクラブ長と二人で下の店まで出かけた。ブツブツと文句をいいながら、なにげなく道端の溝をのぞくと、長々と体をのばして休息中のへびと目があってしまった。ぎゃあおうへびの方が驚くような悲鳴をあげて、一目散に駆けだした。そしてそのうち雲ゆきまで怪しくなり、パラパラと雨が降り出した。慌ててひき返したが、五分としないうちに激しい降りになってしまった。その上、目の前で空を二分するかのように稲妻が光る。だんだん恐しくなり、必死の思いで公民館に駆けこんだ。上から下までずぶぬれの状態だった。

七時頃先生は到着した。小学校へ寄り、教育長さんに挨拶したりして手間どったようだ。特に小学校の大野先生からは、子どもたちが集めた民話の印刷物を借りてこられた。大阪の画用紙に色とりどりのさし絵が入り、面白い話もいくつか採集されていて、大いに役に立ちそうだ。ありあわせのもので夕食をすませた後、懐中電燈をもってお年寄の家を訪ねたが、八時だというのにどの家も明りを消していた。後で、夜はみんな疲れていてすぐ寝てしま

うから行かない方がいいといわれ、もつともだと思ひ反省した。公民館にもどり、十時頃就寝。

## 八月一日(火) はれ

真夏とはいっても、明け方は毛布一枚では寒い。朝食当番の人が起きていくのを感じながらうとうとしていると、突然「せんばーい」という声に呼び起こされた。何ごとかと思ひ、慌てて台所へとんでいくと、「ガスきれちゃったんです」とせつなそうな顔をしていた。「どうする？」部長と顔を見合わせた。それから、朝早く失礼だとは思ったが区長さんのお宅へ行って事情を話した。するとその家のおばさんが、「うちの一つはずしてもってきやいいわ」とガス屋さんに電話してくださったたり、朝早いというのにすぐにとんできてとりつけてくださった。この親切な行為に私たちはひどく恐縮し、またすっかり感激してしまった。

てんやわんやの朝食の後、部長と先生は買い出しに、残りは三班ほどに分かれ、川浦で調査をした。私たちは部長の帰りを待ってでかけた。私たちもこの頃には、だいぶ聞き方が身につiki、なんとか話をひきだせるようになっていた。もうすっかり顔なじみになった奥原喜運治さんのお宅では、むじなを見せていただいたりした。

私たちが道を歩いていると、通るたびに一人暮らしたというおばあさんが、「あがつてお茶飲んでかないかい」とことばをかけてくれた。寂しいんだろうなあ……と胸をつかれる思いだった。また他の班は訪ねた家で、「わしは昔話なんて知らねえ、むじなやきつねに化かされた話なんて全部ウソだ」といつて相手にされなかったと嘆いていた。

午後は寄合渡や神谷あたりまで足をのばして調査した。私たちの班は先生の車で大平へ行った。そこで訪ねた家で、牛の首をいれたら湯がさめた話や、勝山さまの鞍かけ石の話などを聞き、川浦とはまた別にいろいろな話が伝っていることに興味を覚えた。また、こういうことは後々まで残しておきたいことだから頑張ってくれと励ましてくださるお年寄もいてたいへんうれしかった。

公民館に帰ると、私たちが一番早かったので、夕食の準備をしてみんなを待った。六時頃ドヤドヤと帰ってきた。中には、調査中に道端のお不動様を倒したとかで、たたりじや、たたりじや」としきりに手を合わせている人たちもいて、みんなの笑いかけていた。またある班では、訪ねた家のおばあさんがたいへん教養のある方で、見せていただいた「妙見尊」という本を読む際、漢字をたくさん教わってきたなどというエピソードもあった。しかしこの日はそれぞれの場所でかなりの収穫があり、夜は再話する

のに非常に忙しくて、うれしい悲鳴をあげていた。

### 八月二日(水)はれ

この日は昨日にひき続き、神谷・入山の調査と、更に足をのばして野麦峠を越えた岐阜県側の調査をした。去年あれほど苦労して登った峠を、今年は車の中から眺めた。いきあたりばったりで行ったが、運よく野麦で二番目に年をとっているというおばあさんに会い話を聞くことができた。峠を越えて飛騨へ入ると話し方がやわらかくなり、それからおばあさんみたいへん優しい口調で話ってくれた。それからさらに、阿多野郷という山深い里へも行った。道が険しく、対向車でもあると寿命の縮まる思いだった。そこで訪ねた家ではおばあさんから小さな子供まで、家中で調査の相手をしてくださったり、新しい話をいくつも聞くことができた。時間がなくて十分な調査はできなかったけれど多くの収穫を得て大満足だった。

公民館へもどると、もう帰りの時間が迫っていた。昼食をつめこみ、かたつけをし、荷物をまとめた。区長さんにお礼をいい、とぶようにして停留所へ向かった。「慌てなくていいよ。」という親切な運転手さんの言葉に甘えて、運転手さんまませえ、みんなで記念写真をとった。それから

また去年のように暖かな人たちに見送られてバスに乗りこんだ。さまざまな感慨を残して、バスは奈川村を発った。

(唐沢恵津子記)



集めた資料はその日のうちにテーブル起こしをする。夜半すぎに及ぶ辛い作業だ。

参考文献

- 「日本昔話名彙」 日本放送協会編(昭和二十三年)  
「南安曇郡誌第二卷下」 南安曇郡誌編纂委員会編(昭和三十七年)  
「日本昔話事典」 稲田浩二・大島建彦ほか著(昭和五十三年)  
「日本民俗事典」 弘文堂編(昭和四十七年)  
「講座 日本の民俗」 「口承文芸」 有精堂編(昭和五十三年)  
「信州の方言」 馬瀬良雄著(昭和四十六年)  
「いろりばた」 共立女子大学日本民話研究会編(昭和五十三年)  
「飛驒の伝説」 小島千代蔵著(昭和四十六年)  
「信濃の民話」 信濃の民話編集委員会著(昭和三十二年)  
「信州の伝説」 浅川欽一著(昭和四十五年)  
「木曾のでんせつ」 生駒勘七著(昭和四十九年)  
「私の日本地図」 宮本常一著(昭和四十三年)  
「あゝ野麦峠」 山本茂美著(昭和四十三年)  
「飛驒の系譜」 桑谷正道著(昭和四十六年)  
「飛驒の民話」 和田善直著(昭和五十二年)



古くて大きい民家の庭先で聞く(川浦にて)



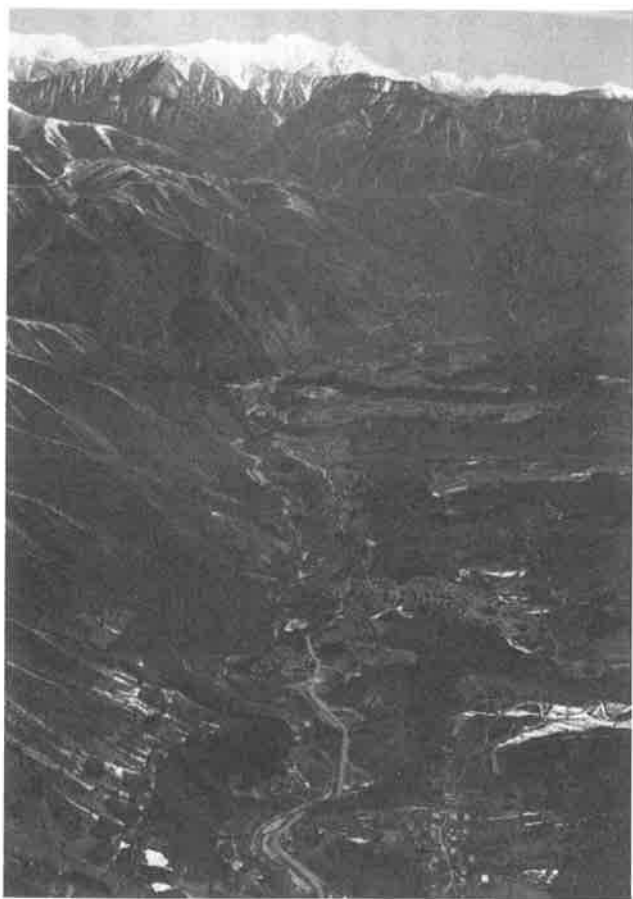


野  
麦  
街  
道  
の  
村  
と  
町



ポツカ・牛方とエ女の足跡

野  
麦  
街  
道



奈川村上空より街道を望む。安曇ダムもみえる。遠方の山々は北アルプスの連山

松本から旧梓川(樽木川)の右岸の村々を通り波田村(現波田町)に出て、橋場・稲核・大白川・入山・角ヶ平・古宿・寄合渡・川浦と奈川谷に点在する諸集落を経由して野麦峠を越え、飛驒の高山に至る道をいう。一方、角ヶ平から祠峠を越えて、大野川・沢渡と現在の上高地ルートを通り中の湯で左折して安房峠を越え平湯へ出る古道もあった。

この街道は、一八七一(明治四年)年筑摩県庁が松本に、支庁が高山に置かれるとともに公道道としてのにぎわいを見せるようになったが、その前の江戸時代にすでに奈川十ヶ郷(現在南安曇郡奈川村)で尾張藩から「尾州岡舟」の鑑札を受けた牛方と飛驒高山のポッカとが信州からは米や清酒を積み出し、飛驒からは白木と曲げ物、「飛驒ふり」などを運びこむために盛んな往來をみせていた重要な交易の道でもあったのである。



野麦峠上空より高根村野麦部落を望む(飛驒側)

## ああ！飛驒がみえる

## 野麦峠

乗鞍岳と鎌ヶ峰との鞍部にあり信州と飛驒との境をなす峠。標高一六七二メートルで、北アルプス越えの峠（安房峠・中尾峠・野麦峠・針ノ木峠）のうち最も低いので古来盛んに用いられてきた。諏訪地方の製糸業の発展とともに、飛驒の娘たちが、キカヤの製糸工女として難儀しつつこの峠を越えた様は、山本茂美著「あ、野麦峠」にリアルで詳しい。峠には、天保年間に建てられた供養塔や「あ、野麦峠」の碑、ここで、「ああ、飛驒がみえる！」と一声叫んで息絶えたという悲劇の工女政井みねの碑があり、真正面に乗鞍岳を望む絶好の展望地で、昭和四十四年に開かれた車道が整備されつつある。信州側の奈川村川浦部落および飛驒側の高根村野麦部落よりいずれも徒歩約一時間半、車では二十五分の距離である。岐阜県立自然公園に指定されている。

また、この峠の東麓に位置する奈川村は古くから、牛糞うしごぎすなわち牛背による荷物の附け送り業が発達した村で最盛時には牛数四〇〇頭、一人五頭ずつの牛を追って渡世するもの七十余人ともいわれた。西麓の高根村野麦はポツカすなわち荷を背負って運ぶ業者の村として知られ「野麦の



飛驒側積雪3メートルもあろう鞍部にある峠の頂上(2月撮影)

「ポッカ」と通称されていた。彼等は五・六人が一隊となり、大体五〇貫目（一八七・五キロ）を背負い、一日に三里を行程として松本―高山間を往復したのである。魚・米・雑貨類はみなポッカの背で運ばれ、江戸送りの飛驒の白木類はすべて奈川の牛附けて運ばれたという興味ある対照もみいだせる交易法である。

（「野麦街道のポッカと牛方」参照）



野麦峠頂上にて。あ、野麦峠の碑。



大平の鞍かけ石。馬の鞍かけには格好の型をしている。(大平)

#### ◆野麦峠の由来◆

峠の頂上や登りつめるまでの旧道端の斜面は、びつしり熊笹におおわれている。十年に一度ぐらい、麓の村が凶作になる年には、不思議にこの笹の根から、稲に似た穂が出、少しばかりの実をつけるそうだ。飛驒ではこれを「野麦」とよんで実をすりつぶし、団子にして飢えからのがれたという。



美しい白樺林(高根村)



野斐峠頂上にある無縁仏供養塔は熊笹の群生の中にある



野斐街道端の民家(朝日村)



唐松林の中を走っている旧野麦街道(信州側)



「兄の背に野麦峠を登り詰め、飛騨が見えるの  
一声で比の世を去ったおみねさん、聞くも語る  
もみな涙」(お助け小屋にて)



旧野麦街道(飛騨側)



信州側の村と町



## 松本市のベッドタウン

## 波田町はた (長野県東筑摩郡がらとくま)



松本電鉄新島バスターミナル。北アルプスの登山基地としての夏のにぎわいは格別だ

松本盆地の南端、梓川扇状地の右肩に位置を占める。今では松本市のベッドタウンともいえる町。古くは波多村であつたが、灌漑かんがいに努め、水田を増加させたのに伴って波田村と改名し、一九七三年町制をした。しかし、比高四十メートルの段丘上の地であるため、水に乏しく現在でも畑地が多いので、カラマツやマツの苗木を特産としている。松本から電車で四〇分、松本電鉄島々線の終点「島々」しましまがある。人口約九〇〇〇、面積五九・二〇平方キロメートル。

## 東洋のグリンデルワルド・上高地と乗鞍と

面積四〇二・七八平方キロメートル、人口約二、五〇〇人という広大な村。梓川上流の飛驒山脈中に位置を占める。大きく梓川の中流地帯、梓川上流の上高地、槍ヶ岳・穂高岳の山岳地帯、乗鞍高原の四地域に分けることができる。古くは、安房峠越えの鎌倉街道、野麦峠越えの野麦街道の



安曇村入口にて

## 安曇村（長野県南安曇郡）

中継点であり、梓川上流の山から切り出す木材の杣村でもあった。現在は、中流地域に東京電力の発電所が設けられ、とくに戦後一九六四―七二年にかけて奈川渡・水殿・稲核に三大ダムが構築された。あわせて九〇万キロワットの電力を供給している。



中部山岳国立公園管理事務所(安曇村)

また、上流の上高地は、中部山岳国立公園の中心となる代表的観光地であって、夏と秋の観光シーズンには徹底したマイカー規制も行われる。ここから徒歩一日行程の槍ヶ岳、穂高岳はいずれも三〇〇〇mを越える岳人あこがれの北アルプスの主峰。乗鞍高原は乗鞍火山帯の東部番所を中心とする一三〇〇〜一六〇〇メートルの高原で、この村が開発に力を入れているところである。牧場やツツジの名所があり、近くには白骨温泉がある。



雪上用のカンジキ



トウミ 風を送り穀物のゴミを除く

## 昔牛方の村。今はユニークな観光に生きる



にやうやま  
入山部落の開道記念塔。寄附者の中に「牛土中」の文字がみえ、かつてのこの村の業を浮きぼりにしている。(入山)

飛驒山脈中、梓川の支流奈川の全流域にわたって点在する集落によって成立する。南安曇郡の最南端に位置し、以前は西筑摩郡（現木曾郡）に属したが、交通事情の変化に伴って、一九四八（昭和二三）年、南安曇郡に編入された。信州側最奥の村のように考えられるが、古来、飛驒と鎌倉や江戸、信飛間を結ぶ街道の通過地として重要な役を果し、上方文化取得の入口にあたる村でもあった。野麦峠―寄合渡―境峠―木曾藪原のルート（木曾街道）は鎌倉時代からの官道として重んじられ、幕府巡検使や天領飛驒国

## 奈川村ながわ（長野県南安曇郡）



寄合渡の分岐点。左は境峠越えの木曾街道、まっすぐ登ると神谷、川浦を通過して野麦峠へ。

支配者高山郡代等の往還路と定められていたが、江戸中期以降、野麦峠―寄合渡―入山―稲核―松本の野麦街道が整備されて、これが主道となった。日本海の手産物や飛驒の白木類などが野麦のボツカや奈川の牛方によって搬入され、安曇平の米などが飛驒送りされた道である。越後のいわし

や北海道のするめまでもこの街道を經由して中信地方に搬入されたとの古文書も残されている。とくに、松本地方の年とり魚として欠くことのできない「飛騨ぶり」は能登の寒ぶりが高山に集積された後、ボツカの背で丈余の雪なすこの峠を背負われて入ったものとして有名である。

また明治以降、諏訪地方の製糸業が盛んになると、飛騨から岡谷への女工たちもこの街道を難儀しつつ往来、悲喜こもこもの人間模様を染めこんだ。

しかし、中央線・高山線の開通はいっさいをさびれさせた。村では、北アルプス上高地に近い村として観光開発に活路を求め、とくに都市部の学生児童に自然教育の場を提供するというユニークな回春策が成果をあげつつある。

### ▽安曇三ダム△

梓川上流の安曇村・奈川村にかけての三つのダム湖、稲核・水殿・奈川渡ダムを総称してこういう。中でも奈川渡が、高さ一五五メートルのアーチ型でもっとも高く東洋一の発電能力を誇る。そこに湛えられた水は細長い梓湖となつて、上流七キロの黒川渡近くまで達している。渓谷の雄大な造形美である。

三ダムの総貯水量は一億五〇〇〇万トン、最大出力九〇

万千瓦ワット。多目的ダムなので発電のほか、中信平総合開発をも兼ね、農業用水にも使用されている。一九六四（昭和三九）年に東京電力が工事に着手。五年の歳月と、五四〇億円の巨費、延べ五〇〇万人の労力を投入して建設したものである。

なお、水殿ダム近くには「発電資料館」があり、稲核ダム近くの稲核部落では草木染め「深山布」が織られている。



水殿ダム近くの発電資料館

### ▽奈川温泉△

新島々駅からバス一時間。奈川橋より野麦街道へ入り、梓湖の東岸を奈川村の中心地黒川渡まで登っていく。役場のところで右折してスーパールン道へ入り、約一〇分、料金のあたりが奈川温泉である。黒川渡で奈川に注ぎこむ黒川河畔のひなびた出で湯として鎌倉時代開湯という古い歴史をもつ。昭和三十三年にボーリングに成功、溪流のせせ



黒川渡にある民芸風旅館

らぎとたつぷりした温泉が旅情をいっそうかきたてる近代  
的な温泉として生まれかわった。なめらかな炭酸泉は神経  
痛・胃腸・皮膚病・リウマチなど効能も広く、身体にあ  
たたまる温泉として知られる。旅館は三軒ある。

### ▽奈川村営保養センター「奈川荘」△

奈川村黒川渡にある村営奈川荘は、二〇〇名収容の保養



奈川村営保養センター「奈川荘」都会の子どもの自然教育に使われる。  
(黒川渡)



センターで、もともと都会の子どもたちに自然との接触をというが目的で開設された施設なので学生や学童の団体優先。通年開設しているが、とくに夏季には子供村が開設され、三泊四日で都会の子どもたちに川遊びやキャンプを指導、自然とのコミュニケーションを深めるプランを立てている。年間利用者約八〇〇〇人。修学旅行の生徒が多い。一般客も予約すれば、宿泊に応じてくれる。

問い合わせ先（奈川村役場観光課） 〇二六三七九一二一  
（一一）

#### ◇夏休み子ども村◇

黒川渡の村営保養センターは、毎年夏休み中、都会の子どもたちに占領される。旅行会社が募集して四十七年から続けている夏休み子ども村だ。参加者は年々増えて、ことしはのべ二九〇〇人。三泊四日の日程で野麦峠や上高地の自然に親しんで帰るが、特に人気があるのは、村のどこにでもいる牛だそうである。

#### ▽白樺峠△

この地の人々は白樺を「かんば」とよびならわしている。白樺峠は、この村でも最も見晴らしの良い峠で、ここから眺める北アルプス連峰や乗鞍岳の雄姿には誰しも圧倒される。

峠までは、四・七キロメートル、舗装されたスーパー林道（白樺峠を経て白骨温泉に通ずる・有料）が通じ、保養センター裏からの遊歩道もある。峠周辺は、名の通り白樺の天然林とツツジの群生が美しく、春には、村でも保存会を作って保護育成に力を入れている、奈川名物の御殿桜（二〇〇〇本がいっせいに花開く）。



奈川村を貫通する奈川の支流。冷たく清い川底にはイワナやヤマメが好んで住む。

またこの辺一帯は山菜の豊庫ともいわれ、ワラビ・ウド・タラの芽・キノコなどが春から秋まで楽しめる。

#### ▽木曾路原高原△

鉢盛山麓の九〇ヘクタールにおよぶ保健休養地。長野県企業局によって開発が計画され、大型分譲地・個人別荘地と併せて、運動広場にはグラウンド、テニスコート、バレーコートを完備。現在、温泉ボーリングが進み、地熱は四〇度以上になっている。温泉が出たら、村はまず温水プールなども造り、次にスキー場を建設して、通年誘客のできる一大ヘルスリゾートをめざしている。



龍宮湖のあったというあたり(神谷)

#### ▽民俗資料館△

黒川渡の公民館に隣接して建設。五十五年四月にはオープンする。江戸時代に「尾州岡船」の鑑札を尾張藩より下され、野麦街道はもとより名古屋・江戸まで勢力はもっていた奈川牛方の資料を中心に、炭焼き・わらび粉精製の資料などが陳列される予定。



川浦部落より野麦峠を望む。

◇「渡」とは何か◇

一般に「渡」とは渡し場ではないかと思われるが、もとは「土場」から発した名。土場とは、山から伐りだした材木を集積する所の意で、そこから材の一本一本に木印をつけて川へ流した。下流の集材所では、トピ口で流れてきた材をとりあげるといように川を輸走の手段に使ったのである。この村にも奈川渡・黒川渡・寄合渡など「渡」が多い。

▽奈川獅子△

毎年九月一日（もとは二百十日の日）の天狗大明神（寄合渡）の祭礼に、夜を徹して奉納される。青年団による大人の獅子舞と小中学生による子供の獅子舞とが行われるが、平地のものと違って、ヤリやナギナタを持った三人の獅子が壮絶な闘いをくりひろげる華やかで勇壮な舞いである。

もとは飛騨から移入したものだとも富山からのものだというが、飛騨の界には次のような縁起が伝えられている。

——その昔、飛騨の山奥に一匹の大獅子がおって、家畜

に危害を加え、村人たちを苦しめとった。なにしろ、一夜のうち七つの山をひとつとびしてしまおうという大獅子やっつんで退治するなど思いもよらん。村うちの衆は、ただだ苦しめられとるばかりやっつた。

ところが、あるとき味方の大天狗が現われてなあ、大獅子をうちとったかみえたんやが、なにしろ名うての怪物、大獅子や。再び息を吹きかえしてしまった。そこでこんどは、狩人の中にいた薙刀使いの名人が大格闘の末、やっつ



かつての工女宿「ほうらい屋」(川湍)

最後のとどめをさしたということや。――

ここの獅子舞でも、この過程を息づまるような迫力で演ずる。この獅子舞がなぜこの地で行われるようになったかの伝承は、本書「寄合渡獅子舞縁起」をみていただきたい。また、この夜、村中の人々によってにぎやかに行われる祇園ばやしも、村の文化財として保存されている。その他、古宿の子安諏訪神社の例祭は五月三日。



野麦街道は川浦部落のはずれより山深く分け入っていく。



ほうらい屋の大正2年7月の宿帳。「舎製糸所出張員外四拾人」などという記事がみえる。

▽山里の味覚―ウサギ鍋と投汁ソバ△

ウサギ鍋は、山里の珍味野ウサギの肉をすき焼き風に味噌仕立てのダシで煮こんだもの。野ウサギの肉は淡白で味良いうえに柔らかく、イロリにかけたあつい鍋を皆でついついて楽しむふん囲気がまたいい。みりん漬にした肉を焼き鳥風にしたものも好評。



野麦峠「お助け小屋」のメニュー「ひえめし」。

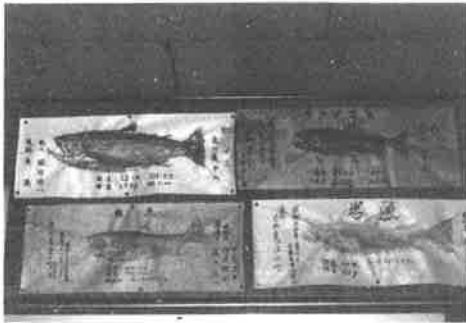


川浦にて。板ぶき屋根の右奥方に野麦峠が望まれる。

奈川村は標高一〇〇〇メートルの高冷地であって、そこで穫れる奈川のソバは、風味豊かな郷土の味がする。石うすでひき、手打ちにしたソバを「投汁ソバ」にして食べる。そばつゆを煮たて、その中でサツと煮て汁気を切り、だし汁のほどよくしみこんだソバを加えた独特のもの。さっぱりした口あたりのよいソバとワサビの香が調和して山里のピリツとしまった爽やかな味が何ともいえない。

### ▽溪流の釣り△

この村を流れる奈川の清流にはイワナ・ヤマメ・川マスなどの大物が多く、糸をたれる釣り人も多い。地元にも釣りの名人が何人かおり、いろいろ指導してくれるドライブインの主人もある。



マス・イワナの大物魚拓。体長52cm、体重1.7kgという岩魚もある。  
(奈川渡ドライブイン忠治)

### ◇奈川村の姓◇

役場の調べだと、村内の姓は四十四あるという。人口の規模がこの村よりひと回り小さい村でも六十ほどが平均だというから、おそらく県下一・二の姓の少ない村といえる。

その中でも一番多いのが奥原姓。ほぼ二軒に一軒の割合である。とくに一番奥の川浦と保平の二つの集落は、集落ぐるみ各二十戸ほど全部が奥原を名のり、大平と追平の両部落三十軒ほどのうち、外より入った家を除いて全部勝山姓。村ぐるみ血縁で結びついた社会ともいえる。

また、野麦峠を越えた隣村の岐阜県大野郡高根村にも、奥原姓が多く、両村の交流が多い。春秋二回の村役場職員の懇親会が長いこと野麦峠の頂上で続けられているというし、最奥の川浦部落などはほとんどの家が高根村に親類をもっているほど。峠を越しての嫁入りが古くから行われている。



川浦部落の公民館で毎年1月1日は青年団の親睦会が開かれる。



野麦峠頂上の「お助け小屋」かつての工女宿を運びあげた(高根村)



大木に寄生する宿木の大量(ホヤ)



山はだに昔しのおもかげを残す桑畑(黒川渓にて)



水小屋(峠頂上にて)



寄  
稿



## 野麦街道のボツカと牛方

筑波大学 胡桃沢 勘 司

野麦街道は飛騨高山と信州松本を結ぶ道である。峻険な北アルプスを越すため今はほとんど機能を果していないが、近代的交通機関発達以前においては重要な交通路



野麦峠付近の旧道（この稿の写真は筆者撮影）

として利用されてきた。とりわけ広く知られているのは飛騨各所から信州岡谷へ出稼ぎに行く女工が通ったこと、および所謂「飛騨鱈」の移入路としてのそれであろう。女工について、山本茂実氏がその著『あゝ野麦峠』で詳しく述べておられるのは周知のとおりである。

かつてこの道で物資の輸送に携わった輸送機関にはボツカと牛の二者があり、そのうち飛騨驛を信州に運びこんだのはボツカである。ボツカは人間が自ら荷物を背に負って運ぶ、運搬法としてはもともと原始的なもので、運搬用具にはシヨイコもしくはシヨイタと呼ばれる背負梯子、およびネンボウという杖を用いた。この街道のボツカは「飛騨のボツカ」と通称されるとおり、信州よりむしろ飛騨から多く出ていたようで、男女共に荷をオネタ（背負った）ものである。背負う重量は男が十六貫（約六〇キロ）、女が十二貫（約四五キロ）くらいが標準であったという。歩く速度はきわめて遅い。少し歩いてはネンボウをシヨイコにあてて立ったまま休み、それからまた進む、ということを繰り返していくからで、最大の難所野麦峠を中に挟んで三里（約十一キロ）の野麦―川浦間は雪の深い時などまる一日かかることもあったそうである。雨や雪が降れば頭から荷物の上に蓑蔭を掛けて凌いだが、この風体は柳田国男氏によって高野聖のそれに相通ずるところがあると指摘され

ており、古い形態を伝えるものとして注目されよう。

牛や馬は江戸時代以降広く物資輸送にも利用されるようになったが、道の悪い野麦街道において足の弱い馬を使うことは叶わず、もっぱら牛の背に委ねられていた。この牛を追ってゆくのが牛方で、飛騨・信州の人々が共に従事していたが、なかでも信州奈川村の牛椋ぎはその名を知られた存在である。江戸時代、奈川村が尾張徳川家の支配を受



牛舎に貼られた牛の絵馬（奈川村寄合渡）

けていたことからこれは「尾州岡船」と呼ばれ、その活動範囲は遠く上州倉賀野にまで及んでいた。牛は佐渡牛と言われ、黒い、体重百五十貫（約五百五十キロ）もあろうかという大きな牡牛で、しかも力を出させるために去勢をしていなかった。そのため大変気が荒く、うっかり近寄ることもできなかつたという。一頭に三十二貫（約百二十キロ）の荷物をつけ、最盛期には「ゴトウヒトクミ」と言って牛方一人が五頭の牛を追ったが、後には二、三頭になった。輸送力はボツカよりはるかに大きかったわけだが、雪のある時は動くことができず、したがって年末の鱒輸送はボツカによって行なわれたのである。

（筑波大学大学院博士課程）



ショイコとネンボウ（高根村野斐）

## 野麦街道・奈川の石造物

文芸クラフ顧問 征矢野 宏

古くから「飛驒道」と呼ばれ、「野麦街道」と称えてきたこの道は、かつて松本から奈川を経て野麦峠を越え、飛驒高山から越中・加賀・能登・越前へと通じ、信州と北陸との物資交易の大切な道であった。松本地方の正月の食膳に無くてはならぬ飛驒鱒（正しくは能登鱒）もこの道を越えて来た。冬期は牛馬の物資運搬もままならぬ険難の道であり、糸引工女も筆舌に尽くし得ない苦難を重ねて行き来した道であった。

山峡にひっそりと息づくこの街道筋にあつて無言の中にこうした厳しい歴史のあとを語り、往古の村人やまた旅人の喜怒哀楽の姿を偲ばせる数多くの苔むした石仏や道祖神、それに新旧の墓碑・記念碑が残されている。今それら石造物の素朴なたたずまいを求めて、この街道筋を巡り歩いてみる。

### 一、入山・田の董の石造物

奈川渡ダムの上に出る入山隧道の入口手前から左に分か

れ、断崖の下を胆を冷やしながら恐る恐る上る。危険な岨道を辿り辿りしてようやく到り着いた山の中腹に、僅かな平地を求めて開かれた入山の集落があり、その村の入口の路傍に年古りた一基の自然石の碑が佇んでいる。碑面には「岨道新造塔」と刻まれており、かつてこの山の峻しい斜面に新しく岨道が開通したことを伝える記念碑である。碑文の両脇に「天保十五載、辰七月吉旦」とあり、下部に建碑発起人の名が記されているが、その中に「商人」、「牛士」の文字も見え、往時の街道の模様も偲ばれて興味深く、なるほどと首肯される碑である。

谷間のはるか下方に奈川渡ダムによって出来た梓湖を見下しながら岨道をゆく。新しい家の立ち並ぶ集落と、廃屋の目につく旧い集落との間に道祖神があると聞き、訪ねあてたものは山腹に安置された古い大日如来の文字碑と、智拳印を結ぶ金剛界大日如来の坐像の二碑であった。この村の道祖神は「道祖仏」であるといった人があるというが、確かに村人や旅人にとってこの峻しい街道筋では、道祖神も石仏もその区別すら忘れる程に、変りない祈りの対象であったのであろう。この石仏はこれから先の各集落に圧倒的に数多く存在する「大日如来」であるが、村人はこの石仏を「牛の神様（仏様）」として各所の路傍に安置した。先程の記念碑に刻まれた「牛士」の文字からも推測されるよ

うに、「牛」が「馬」と共にこの山里にとつて如何に大切な存在であつたかを想わせるものである。

入山の集落から嶮岨な道は新道に合流して田の萱の集落に向かう。角ヶ平隧道を抜けてしばらく、道路脇の石垣の上に二十四基の碑石が三列に立ち並ぶ。八基の墓石と共に七基の大日如来文字碑、像碑二基、馬頭観音三基、碑面不明の碑石三基、それに道祖神文字碑一基が据えられているものである。ダム建設により水没した角ヶ平・松竹の両集落の碑石もここに集められたという。したがって、最初に建てられた場所や碑石の向き、そしてそれら碑石造立の背景を知ることが既に不可能になつてしまつた碑石群である。

こうした古い街道沿いの碑石に対し、入山隧道に入り、そのトンネル内で上高地方面に行く道と分かれ左に抜け、湖を右に見ながら田の萱集落に到る新道の途中に、新しく二基の碑が建つた。一つは殉職の碑であり、他は水没記念碑である。前者は昭和五十一年一月二十日正午、凍結した路面にスリップした車諸共湖底に沈み、若い妻子を遺して公務殉職した「山口新一技師殉職之碑」である。縦一七八センチ、横七五センチの碑は、長野県建設技術センター・長野県土地開発公社職員により、昭和五十一年八月一日に建立したものである。新しい時代の新しい道にもまたあらたな険しさのつきまとう山深い村里である。後者は「昭和四十四年

三月三十一日、奈川渡ダム湛水により、角ヶ平部落四十三世帯、田の萱部落十九世帯、此の地より移住を記念して之を建つ。昭和四十八年六月吉日、奈川村角田水没者連盟」と碑陰に記された縦一七〇センチ、横二三〇センチ、台石の高さ一〇〇センチの大きな「水没記念碑」である。

山峡深く目の下に青々と水を湛えた湖を見下しながら碑の下に佇むとき、湖底に消えた六十二世帯の住居と、住み慣れた土地を去つた人々の事がしみじみと偲ばれるのである。(写真①～⑥参照)

## 二、古宿の道祖神及び石仏群

かつて西筑摩郡（現、木曾郡）であつた奈川村が昭和二十三年、南安曇郡入りをした際に建てられた「郡境変更記念碑」のある黒川渡の村役場の手前を鋭角に曲つて、斜め左後方に登る急坂がある。「古宿」の集落へゆく道である。

急坂を登りつめ、道を左へ左へとつてゆく。役場から数百メートル、そこに質素なお堂（堂内には十王その他の佛像が十数体安置されているが、村人はただお堂と呼んでいる。）と石仏群の立ち混る墓地がある。入山から田の萱に下り再び上つてきた旧野麦街道の道端である。お堂の前に一基の大きな自然石の記念碑があり、堂脇にはかなり年数を経たかと思われる一基の道祖神を中心に十二基の石仏

群が立ち並んでおり、あたり一帯は墓地をなしている。

幾百年を経たかと思われる桜の老木の傍に立つ記念碑はその碑陰によれば、かつて野麦街道として賑わったこの旧道が新道高山線の開通により廢道となっていたものを、その後ダム建設の補償として古宿・田の萱間を改良した記念に建てたものであるという。こゝもまた昔は四尺にも充たなかつたであろう道を牛馬の荷駄や糸引工女達が行き交ったところである。

堂脇の石仏群の中央にある道祖神は永い年月を風雨に耐えてきたと見え、風化がひどく、高さ五七寸ほどの碑石も欠け損じ、握手する二神の像も磨滅して、いずれが男神か女神か、その衣装・髪型から判断することもできない程である。ただこの握手像、左の神が右の神の手を握っているように見えるところから判断すれば、常識的には左が男神ということになるか。血と汗と涙のにじむ飛驒の糸引工女の群を幾度か送り迎え、その切ない祈りを受けたであろうこの二神は、自らも幾百年の時の流れの中に満身創痍となり、銘も無く年代もわからない。

この道祖神を中心として居並ぶ石造物は、「蚕玉神」、「大日尊」、「二十三夜塔」、「大日如来」、「馬頭觀世音」、「庚申供養塔」、「法華経塚」等であり、これらは格別珍しいものではないが、「大日如来」の碑に「愛牛為追善」と添えられ、「馬頭觀音」

には「愛馬為追善」と刻まれているのが心ひかれる。山深い村里の食しい生活を支えてくれる重要な労働力として村人が如何に牛馬を家族同様に大切にしたかを、それらは如実に物語っている。涙ぐましい。(写真⑦・⑧参照)

### 三、黒川渡の道祖神と石仏群

「古宿」から再び村役場の処に戻り、新道を少し逆戻りしてT字路を西に入る。この道を数百メートル、橋を渡って屋形原の集落に入る手前の山麓道端に七十基に及ぶ種々の石造物があり、一堂に会する感じで居並ぶ。三十三觀音をはじめ巡礼供養塔・白衣觀音・不動尊・大日如来・馬頭觀音・名号碑・二十三夜塔・庚申石祠・蚕玉神等が傾斜地を幾段かに設えた上に整然と据えられたものである。

この石仏群のほぼ中央に位置するところに苔むした道祖神が一基据えられている。縦七〇寸・横六〇寸の自然石に像高三七寸の双体像を彫ったもので、右側が男神・左側が女神の端正な姿の握手像である。造立年代は不明であるが、江戸末期頃のものであろうか。碑石の下部左隅に「願主・藤右衛門」と刻まれている。

ここでも居並ぶ石仏群に伍して仲睦じそうな男女の双体像が立つ姿に少なからず奇妙な感を抱く。なぜならば松本や南安地方に多い道祖神は、これ程多くの石仏群に取り囲

まれるようにして立つ姿は稀で、石仏群とは別に単独乃至はそれに近い状況の下にひっそりと路傍に佇立する場合の方がむしろ多いからである。この石像のあるものは以前は現在の役場のあたりにあったものを役場の新築に際して、現在地に移し統合されたものであるという。そうした事情を知らばこの状態も頷けるところではあるが、この道祖神の場合、あまりにも多くの石仏群に囲まれ、しかもその中心の位置にあるだけに格別奇異の感が湧くのである。いずれにせよ、これから訪れるこの村の道祖神はいずれも他の石仏群と一つ所に佇立しているのが他所とは異った面白い特徴といえる。前述もしたように、やはりこの街道では道祖神も石仏も区別ない程に、人々の純一無雑な祈りの対象であったのであろう。(写真⑨・⑩参照)

#### 四、駒ヶ原の石仏

この奈川渡の石造物群の所から更に山ふところに向かつて谷川沿いに遡る。屋形原集落を過ぎ、奈川温泉への入り口とY字状に分岐する道を右にとる。この山道を徐ろに上ること約一キロ、小黒川とカンバ沢の谷川が合流するところ、その両谷川にさし挟まれた位置に十基の石仏群がある。谷川のせせらぎが心地よく耳に響くの他、俗界の物音を遠避けた静寂な谷あいである。

十基の石仏はイチイ・樅・桜の木々に庇護されて立ち並ぶ。二十三夜塔(文政十年)・聖観音像(文化八年)・庚申像(寛政十二年)・馬頭観音二基(うち一基は明治十三年)・大日如来像・不動明王文字碑(右肩に恩賜林記念碑と記されている。大正三年)、それに一石に二像づつ彫られた六地藏三基である。清冽な谷川の瀬音に心底まで洗い清められるような、静かなそして素朴なたたずまいである。中でもとりわけ二体づつ三石に彫られている六地藏の姿に心ひかれる。縦六〇センチ、横三五センチの碑石が二基、他の一基は縦が五七センチと前記二基よりやや背丈が低いが、これら三基に、像高三五センチの美しいお地藏様が二体ずつ端正な姿で刻まれている。思わず合掌する。碑石には中央の一基の左側面に「小山・中や」と記されているのほかも銘はない。いずれ村人の素朴で純粹な信心の現われには相違ないが、造立年代もその背景も知り得ない。これら石仏はこの碑石のある真上の山の中腹にある駒ヶ原集落の、その先祖達の信仰の対象であったもので、今も村人はここに切ない事、苦しい事、そうした娑婆の一切の煩惱からの濟度を求めて参詣する。

この集落はかつて火災に罹り、この六地藏などに関する昔の記録は焼失したものが、今は何も残っておらず、これら石仏の背景を詳かにすることができない。ただ碑石に刻まれた「小山」とは小山氏であるが、今は家も絶えて無く、



また「中や」は奥原正人氏の先祖で奥原音吉を襲名してきた家の屋号であるという。

ところでこれら村人の信心のよりどころである石仏群は、この静かな谷間にいつまでもそつとしておいて欲しいと祈らずには居られない。なぜならば、村人の心を踏みにするような慎み心のない者によって汚されたり、不心得者の野心の対象となることを恐れるからである。またこの集落には「蚕玉様」と称して村人が大切にしている仏像がある。極く小型の女人像である。この像は、もとは山の頂に安置されていたものであるが、盗難を恐れ、村の中に移し安置したというものである。人里離れた山中の小さな集落でもこうした事に心を悩まさない。悲しむべきことである。(写真⑪・⑫参照)

## 五、寄合渡の道標

黒川渡から金原・追平・大平（ここにも道路脇に種々の石仏群が安置されている。）の集落を過ぎて寄合渡の集落に入る。寄合渡橋を渡ると道はT字型に分岐して、直進すれば神谷・川浦を過ぎて野麦峠に至り、左折して進むと境峠を越えて藪原に通ずる。このT字路を左折して五〇〇程進むと、右道路脇に二基の古い道標が立っている。縦一七〇、横六〇の大きい方の碑石正面には、右から左に並べ

て、次のような「みちしるべ」が記されている。「西、ひだ高山。南、きそやぶはら。北、まつもと、ぜんくわうじ」。

また縦八〇、横三三の背丈の低い方の碑石には、まず正面に、「松本より、右ハひだ。左ハやぶ原。」とあり、左側面には、「藪原より、右ハまつ本。左ハひだ。」と記され、更に右側面には、「ひだより、右ハやぶ原。左ハまつ本。」と刻まれている。後者には碑陰に「明治十四年十月建之」とあり、前者には年月日の記録なく不明であるが後者と比べると建立時期は更に古いものであろうと推測される。

ところで、これら二基の道標の立つ位置はどう考えても納得しかねる場所である。碑文から推してT字路乃至は三差路に立っていたものに相違ない。古老に尋ねると果たせるかな、この二基は元は現在地より更に五〇〇程、南に藪原方面に寄った地点にあったものであるという。元の位置は道路と平行して流れる大寄合川に架かる橋の袂、T字路をなすその接点の位置であったという。なる程と首肯される位置である。現在もそこに形ばかりの手摺のついた古い木橋が架かっている。かつては現在の寄合渡橋の位置には橋はなく、松本方面から来た道は現在の橋の袂から川沿いに南に百メートル程進んでから木橋の所で川を渡ったものであるという。橋を渡った位置で左右に分かれ、右は斜め西方に四尺に満たない道が川浦・野麦峠方面に通じていた

のである。現在もその古道の名残りが道標の立つところから右、民家の軒場を通って斜め西に残っている。(写真⑬)

## 六、山田先生の墓碑

寄合渡の道標の立つ道を南に一〇〇㍎余り進んだ所、家並みの切れるあたりの左側に墓地がある。格別に囲いなどつけてない至極自然のままの墓地である。この墓地の一隅、イチイの木の根方に一基の細長い自然石の墓碑がある。苔むした碑面には、「山田金吉郎之墓」と刻まれている。裏面には墓碑銘が漢文で記されているが、書き下し文に改めてみると次のようになる。「松本に産まれ、性温厚にして職を奈川覺(校)に奉じ、よく薰陶し童を教ふ。悼しきかな、公務の途、境峠に迷ひ蹈み雪の巷にて歿す。今、一周年に当たり、有志謀りて碑を建て偉名を存す。」この墓碑銘では詳細は不明であるが、ともかくも明治の頃、奈川学校奉職の山田先生が木曾郡(当時奈川村は西筑摩郡)——現在の木曾郡——に属していた。の学校の会合に出席し、その帰途、雪の境峠で遭難殉職したことを伝えるものである。

この殉職について当時の村人は、山田先生は闇夜の雪中、むじなに化かされて死んだのだという。木曾福島で会合を終えた先生は、寒い冬のこととて酒を一杯やってホロ酔い気嫌で境峠にやって来た。既に日は落ちてしまっていた。

むじなに化かされ、家に帰り着いたつもりで先生は、「峠を越えて来たので暑いわい。」と、衣紋掛けに着物を掛け、それでも冬のことなので炬燵にあたって寝たつもりであった。翌日、いつまでたっても学校に姿を見せない先生の身を案じた村人は繰出で探したところ、先生は境峠の雪の中、木の枝に衣類を掛け、裸のまま川の水に足を浸け凍死していたという。むじなに化かされなければあのような死に方はしない筈だと言い伝えたのである。明治二十九年のことである。明治三十年十二月二十二日建立の墓碑である。

(写真⑭参照)

## 七、寄合渡の石仏と道祖神

山田先生墓碑からわずか進んだところで左に橋を渡って対岸の集落に入る。川沿いの狭い道を一〇〇㍎程遡ると、寄合渡公会堂があり、傍に三十三観音、二十三夜塔、庚申塔・名号碑などが立ち並ぶ。そこを過ぎて更に一〇〇㍎、道路の右側、イチイ・赤松の木々に庇護されるようにして一団の石仏群が立ち並ぶ。文字碑・像碑と二種の馬頭観音などが十基一列に東面して並び、列の右端に二基の道祖神が、これら石仏群に仲間入りして立っている。

二基の道祖神のうち左側のものは、縦九〇㍎、横三〇㍎の細長い自然石の文字碑で、碑陰に「明治二十六年五月十

五日・奥原シカ」と刻まれている。碑陰には肉眼で見ただけでは何も記されていないように見える。拓本に採つてようやく文字があり判読することができる。それほど彫りも浅い。

一方、最も右端に立つ道祖神は一風変わった珍しい像容で興味深い。二体の姿が全く同じで、男神女神の区別もなく、むしろ男女の別を越えた童か、双生児を想わせる。頭巾を被つた像高三〇<sup>二</sup>のあとけない姿態である。像の右傍に「厄除、道祖神」と添えて刻まれているのも珍しく、また裏面には「先の世で借里<sup>か</sup>たをなすか、今貸すか、何づれむくい波<sup>は</sup>無くてかなわ志<sup>し</sup>。僧」とあり、更に「何のその、百万石も笹の露、一茶」と、一茶の句も併記され、昭和四十六年秋八十二才記念、奥原主馬吉」と記されている。至極新しい、しかも個人による作品である。それにしても稚拙さが全面に漂う。像容といい、彫りといい、素人くさい出来ばえが面白い。碑陰に記された施主自身の手になるが、作者は年老いた石工で、この集落のために寄附しようと毎日コツコツ石に向かつて心こめて刻んだという。この人、永年石工として石と共に生きて来た人で、鍼灸術の心得もあり、読書家でもあった。してみると、この作品には人生の深い体験を通して、単純から複雑へ、更に複雑から高次の単純化へと進んだ芸術の道を会得したものがあつたのか

もしれない。そこまで考えずともこの作は作者の最後の作品として童心に帰り、純一無雑の心境で後々の村人のために遺したものであろう。作者は翌年世を去つた。ユニークな道祖神である。(写真⑬・⑭参照)

## 八、神谷の石造物

寄合渡の丁字路から西に野麦峠方面に向かう。奈川の右岸沿いに遡行して神谷の集落を抜け、村はずれに出る。左方から枳洞沢の流れが奈川に合流してくるあたり、旧野麦街道の傍に一団の墓地があり、その墓地の続きに質素なお堂と一群の石仏が立ち並んでいる。お堂とはいふものの一見物置小舎風の建物の、その室内には六地藏・三十三観音像が二列に整然と居並び、他に庚申像等、都合四十四体ほどの石仏群が安置されている。そしてこの室内、板壁や柱の到る処に墨でさまざまの記録がなされている。「岐阜県大野郡冬野村、野口〇〇、大正四年八月三十日通行す。外四名」といったたぐいのものである。明治・大正の頃、ここを通行した飛驒の商人や、糸引工女一行などが休息したであろう姿を彷彿させる落書きである。それは峻難の峠路や岨道を夜を日に継いで行き来したであろう人々の、休息と道中安全祈願の場所であつたのかも知れない。そうした過去に思いを馳せさせるに充分な落書きである。

堂脇には、西国三十三所供養塔（弘化二年三月）、大日如来、その他数基の石仏が立ち並ぶ。それらに立ち混つて一基の苔むした隷書体文字碑の道祖神がある。寛政元己酉歲、林鐘吉祥建之、奥原文平」と裏面に刻まれており、一七八九年六月の建立である。ところが、側面には更に「弘化二乙巳三月若者建之」と記され、「右、ひだ道」と刻まれており、一八四五年三月、即ち前記建立年から五十六年後に何らか手を加えたことを物語っている。それは「右、ひだ道」が示すように、道祖神それ自体を道標に兼用し、ことによると、それに伴つて碑石の位置も多少移動させたことも考えられる。現在地は旧街道の名残を止めており、左は栃洞沢に沿つて山に入る道であり、右は、今は川沿いに走る新道によつて杜絶えた形になっているが、かつては飛驒方面に向かう道であつたことを示している。後者、弘化二年三月という記録については、前記の西国三十三所供養塔建立年月と同一なので、何らか関わりがあつたことは確かであるが、他は憶測に過ぎず不明である。いずれにせよ珍しい記録である。（写真⑰、⑱参照）

## 九、川浦の石造物

神谷を出て道は奈川の流れの左岸に移つて上る。奥神谷・保平を過ぎてゆく途中にも「妙見尊」「馬頭観音」の等身大

の文字碑が路傍に見られる。再び道は右岸に移り、野麦峠に向かう一番奥の集落川浦に至る。野麦越えをする糸引工女達は必ずここで一泊したところ。この集落にはそれら旅人にもまつわる種々の記録や語り伝えが残されている。今はこの集落の裏手、川沿いに開通した新道を通り抜けて、しばらく落葉松林をゆく。やがて林の切れるあたり左手に一段高く、旧野麦街道の名残を止めている部分があり、ここにも種々の石仏群が居並ぶ。周辺には古い墓石も立ち混り、往古のわびしい「ひだ道」のおもかげを思わせる。ここにもまた、例によつて馬頭観音・大日如来・六地藏・庚申像・不動明王・蚕玉神が安置され、背後の斜面にはイチイ・櫛の古木が立ち、クマサザが一面に生い茂る。六地藏・庚申像はそれぞれ木造の祠の中に置かれている。それらに伍して年古りた一基の道祖神がひっそりと佇む。縦四七、横四三の碑石には、跪座した女神が瓢を持ち、男神が立つて酒杯を受けている祝言像である。かなり風化したこの像は、「世（施）主、ハツ」と記されているだけで年代は不明であるが、像全体磨耗の進んでいる中で、男神の顔立ちだけが不思議に鮮明である。

川浦の宿を発つて飛驒に帰る糸引工女や旅人達は、ここからいよいよ長い野麦の峠路に向かつて、心をひき締め、敬虔な祈りをこれら神仏に捧げたことであろう。素朴な人

間の信仰心が産み出したこれら石造物が永い時の流れに洗われ、自然と一つに融け合い、昔日の佛を残しているあたりのたたずまいである。(写真①⑨、②⑩参照)

## 十、石室遺跡の碑および比丘尼の墓碑

川浦を離れ、更に落葉松林の中をゆく。程なくして道路脇の小高くなったところに縦一八〇センチ、横六五センチの大柄な馬頭観音の文字碑が目につく。傍にも馬頭観音と、二基の大日如来の像碑・文字碑が立っている。この野麦街道の途すがら、数多くの大日如来や馬頭観音の碑石が見られたが、この長い飛驒と信州との峠路を越えて交易の荷駄が運ばれるのに、牛馬の力が如何に大切であったか、それらの碑石の存在が如実にそれを物語っている。とりわけ牛は狭い谷あいの道や足場の不安定な岨道をゆくのに、その偶蹄が偉力を發揮したことであろう。この村の随所に散見する「愛牛追善」のための大日如来の石仏がそれを教えている。

さてこのあたりから次第に峠路の様相を帯びてくる。そして二キロ程山路を登ってゆくとクマサザに被われた山の斜面に、道に面して相当年月を経たかと思われる「石室遺跡の碑」が立っている。上部に「南無観世音菩薩」と彫られ、漢文の碑文がぎっしりと刻まれているが、縦一八〇センチ、横五五センチの碑面は永い年月に相当磨滅破損し、ところどころ

ろ欠け損じ碑文も読み取れない部分が多い。拓本に採ってわずかに読み取れた部分を断片的ながら、書き下し文に改めて記してみると次のようである。それ野麦の嶺は飛信の界にして、最も艱嶮の地となすなり。……北風凜冽にして氷雪路を没し、行旅の者にして此の苦寒に逢ひて凍死する者……是において文政八星次、乙酉の秋八月、木曾奈川の住、永嶋藤左衛門〇〇これを見るに忍びず……石を畳み石室を作りて田濃の人円照禪師……佛果、後より来る者、永く凍死を免ると謂ふべし。陰徳を冥々十億万年に積み、子孫に貽すものなり。更に国土の安寧を冀ひ……銘に曰く、……不動、本来空……喝一喝。維の時、文政八年童集乙酉秋八月、信州筑摩郡岐岨之庄八五原田法城山極樂禪寺現〇〇著(菴)謹記」欠損して不得要領の部分もあるが、石室由来の凡そが判断される。

この碑石の傍には由来を記した看板が立てられ、文政八年(一八二五)に奈川村の永嶋藤左衛門が冬の野麦峠越えにおける遭難を救うため避難所として、ここに石室を造り、通行安全を祈ったことを伝えている。現在石室は壊れてなくなつたが碑石だけがここに残されている。冬の峠越えの並々ならぬことを物語る石室遺跡の碑である。

この艱嶮の冬の峠越えに命を落とした一人の尼僧があつた。雪の峠路を飛驒から幾つか越えて来た尼は、この石室

から四・五百メートル奥の谷川の近くまで来たが、遂に力  
尽き雪中に倒れ、こと切れてしまった。懐中にわずかの金  
子を所持していたが、行き倒れの尼を隣んだ村人は、この  
金子を基金として、ここに墓碑を立てその霊を吊ったとい  
う。石室が出来てから九年後の天保五年（一八三四）のこ  
とであった。現在、そこに一基の墓碑が残されている。縦  
五二<sup>二</sup>、横二三<sup>三</sup>の苦むし風化もはげしい小さな墓碑で、  
谷川の手前、橋・樅・白樺などの古木の下に庇護されてひ  
っそりと眠る。墓石には「南無妙法蓮華経・日尊」とあり、  
左側面に「金嘉（州）修行院妙宅日信比丘尼、金○村中○  
安全立之」、右側面には「天保五甲午年霜月九日、施主丸山  
弥七、奥原金七」と刻まれている。風化が進み、文字は何  
れも拓本に採ってようやく判読できる程度のものである。  
歳末も押し迫って急ぎ飛驒に帰る糸引工女達は、その度  
ごとにこの比丘尼の墓に合掌し霊の成仏と峠越えの無事と  
を祈念したに相違ない。（写真⑳・㉑参照）

## 十一、消えた石仏

標高一六七二の野麦峠には奈川村（長野県）・高根村（岐  
阜県）両村によって建てられた、荒垣秀雄氏の筆になる、あ  
お野麦峠」の碑が立つ。この峠から信州側に下ったあたり、  
野麦（クマザサ）——本当はスズタケのことでクマザサでは

ないが、の名が示すように、一面にクマザサに被われた山  
道の傍に、かつて三体の石仏が置かれていた。一体は蓮華  
を捧持した半跏思惟（はんかしゆい）の美しい如意輪観音  
像で、他の二体は合掌像であったという。碑の高さ四〇<sup>三</sup>  
に満たないこれらの石仏は、いつの間にかこの峠路からそ  
の姿を消してしまった。このような山中においてさえ、欲  
に目のくらんだ不心得者による悲しむべき盗難が生じたの  
である。たまたまこの盗難の生ずる前に高橋独山氏によつ  
て、三体の中の一体、如意輪観音像が拓本に収められてい  
た。昭和四十四年の秋であった。拓本によって見る半跏思  
惟の姿、静中に動があり、やや憂いを帯びながら柔和に半  
眼微笑をもって、優しく衆生に語りかけるその面差しは、  
どれ程かこの寂しい山路をゆく旅人の心の支えとなったこ  
とか。物資交易の商人はもとより、明治・大正の頃、幾た  
びかこの峠を難渋して行き来した夥しい数の糸引工女達は、  
その往くさ帰るさに、必ずここに足を留め、祈りを捧げた  
ことであろう。とりわけ工女達は往路にはゆく先に待つ厳  
しい労働における仏の加護を祈り、帰路にはまた雪に埋れ  
た石仏のあたりに、今日の無事を謝していつまでも佇立合  
掌したであろうに。この盗難を聞いたかつての工女は、「も  
う、娑婆は闇じや。」と嘆き、「わたし達が生きているうちに、  
犯人が改心して峠路に並べてくれりや、楽しみをのじやが、」

(朝日新聞)と訴えたという。

峠の高所から西を見て、「アー飛驒が見える。飛驒が見える。」(山本茂実著「あ、野麦峠」といって息絶えたという政井みねも、兄辰次郎の背に負われながら峠を上る苦しい息のもとで、この仏の前に冥目し、最後の合掌をしたことであろうに。野麦峠には、その政井みねの碑が昭和四十三年三月三十日、兄政井辰次郎により、「世話人、岐阜県吉城郡河合村・同大野郡高根村。贈、吉永小百合」で建てられたが、みねの霊も幽明界を異にしながら、なお、どれほどかこの事実を嘆き悲しんでいることであろう。この石の仏を刻んだ人はいかなる人であろうか。そしてこの峻しい山奥に運び仏を安置し、旅人の平安を念じたであろうその人も、嗚かし慨嘆やる方ない思いをあの世でおられるであろう。

野の仏は野に置かねばならない。野に置かれたその時から、それは万民の祈りの対象である。そして野の花と同様に、野にあり自然の懐にあってこそ美しく意義深いのである。そしていずれは元の自然の土に帰してあげねばならないものである。

どこに運び去られ売られたか、野麦峠の石仏は残された拓本によって、わずかにその佛を偲ぶほかない。今は胸元まで被う程のクマザサが空しく風にさやくばかりである。



① 輪道新造塔(入山)

(松本美須々ヶ丘高校教諭・  
信濃金石拓本研究會編集委員長)



② 大日如来 (入山)



③ 田の董の石造物





⑤ 山口新一技師殉職之碑



④ 田の薗の道祖神



⑥ 水没記念碑



⑦ 古宿の道祖神



⑧ 古宿の石仏群



⑨ 黒川渡の石仏群



⑩ 黒川渡の道祖神



① 駒ヶ原の石仏群



② 駒ヶ原の六地藏（中央3基）



⑬ 大平の石仏群



⑭ 山田先生の墓碑



⑬ 寄合渡の石仏群（公会堂）



⑭ 寄合渡の道祖神（像碑）



⑪ 神谷の道祖神と石造物



⑫ 神谷の三十三観音・六地藏



⑬ 保平の石造物



⑭ 川浦の石造物群





㊦ 川浦の六地藏



㊦ 川浦の道祖神 (祝賀像)



㉓ 石室遺跡の碑



㉔ 比丘尼の墓碑



㊦ 「あゝ野変峠」の碑



㊦ 如意輪観音（拓本）

## 奈川村のワラビ粉

文芸クラブ顧問 細川 修

はじめに

〇おてんとさまにここに ほんとにぬくとや

××のあねさの×××のように

(ドッシンショウ ドッシンショウア

掘って掘って掘ってよな)

××のあねさの×××ように

おらが初蕨粉こまこま白て

岳の雪のよね白いよね

みやきかけらりよ大根の白よ

きりよう佳いよいはなになる

(山本茂美「ああ野麦峠」より)

野麦峠をふみこえて、諏訪方面のキカヤへ稼ぎに出ていく糸繰り工女たちの俗謡にもうたいこまれたというワラビ粉は、かつては、この地一帯の副産品としての特徴をもっていた。

しかし、ワラビ根掘りの重労働と、ワラビ粉を精製するまでの煩瑣な苦勞、化学糊の出現による需要の衰退などに

よって、徐々に行われなくなっていく、信州側最奥の川浦部落の昭和三〇年前後を境に、全く姿を消して現在に至っている。(村の中心部に位置する黒川渡では、大正一〇年頃まで、旧街道沿いの村の入口にあたる入山部落では、昭和二〇年頃まで行ったという。)

したがって、その用具類も、現在では、ほとんどが散逸してしまっている。とくに小道具には、消えてしまったものが多い。

しかし、直径一メートル以上もある丸太を掘りぬいて作ったフネなどは、村を歩けば、まだいくつも見られる。

この稿では、ワラビ粉に関する習俗が、完全に忘れられ



長野県南安曇郡奈川村概念図

てしまわないうちにといい思ひの中で、今までに聞き取り得た資料によつて、ワラビ根掘りから、ワラビ粉精製に至るまでの過程を追つてみたい。ワラビ粉の流通などについても興味あるところであるが、調査も中途であるので、詳しくは、稿を改めた。

## 一、ワラビ根掘り

### 1 時 期

秋仕事が片付くと、奈川の女衆は、また忙しくなる。十月中旬から雪の降り積るまで、(ここでは、今ではそう降らなくなつたものの、三尺から四尺くらいも積つたものだという)、ワラビの根を掘る仕事が続いているからである。ワラビ根掘りは、秋、ワラビのシタがすっかり枯れて、養分が根に下つてから(春粉)、春、ワラビの芽が出るまでの間(秋粉)に行うのが有効なのであつて、秋すぎから五月頃までの間の無雪期に限られるのである。

### 2 場所の選定

まず、根にハナ(ワラビ粉・ワラビ殿粉)のありそうなワラビの生えている山野を物色する。

当時、近辺の山野は、ほとんどが部落有または、村有の共有林で、どこでも自由に掘つてよかつたが、牛馬の放牧に使つていた芝地などに良質のワラビが生えるので、好んで掘られた。

しかし、若いワラビの根は、みずみずしいてハナが少なく、また古すぎても良くないので、ワラビ根の見分けには、かなりの熟練を必要とした。飛騨高山より入ってくる熱心なワラビ粉商人は、この頃になると村を訪れ、シタを見れば、「この根にはハナがある。ハナがない。」(シタの葉裏に、赤い胞子の多いものの根にハナが多いという)などと教えて歩いたものだという。

### 3 ワラビ根を掘る人

ワラビ根掘りは、女の仕事とされていた。掘る場所の見当が定まると、「ワラビの根掘りにいかねか。」とか、「ワラビ掘りいいかねか。」といつて互いに呼び合う。たいていが、二〇代から四〇代くらいまでの若い女性で、一組が一〇人前後だつたという。昼食のにぎり飯と、さつまいものふかしやとうもろこしなどの副食物を持参して出かけた。作業は骨の折れるものながら、また、楽しい社交の場でもあつたのである。

「おおいでいったんね。その時分には、一〇人から一二、



野麦街道沿い入山部落の民家

三人は、いったんですね。よび合って。わたしら、十五、六の時に、高い山の峰まで行って、掘ったからねえ。ワラビ根掘りは、激労働だから、いく人は、若い人ばかり、いけどがね。秋を片付けて、それからして、十一月のなかばから、雪の降るまで。みんなでいくで、楽しみでね。山へいくと散らばって、思い思いのとき陣どって、お昼の時も、呼び合って。『お昼だぞう。』って。毎朝早く、六時くらいには、出たはねえ。』（古幡はつ江・明治38生・黒川渡）

「ありゃあ、女の仕事でね。芽のでんうちは、ハナがあるなんてって、五月時分まで行きましたわね。秋も、十一月えつばえぐらえまで、ちったあ雪あつても、遠いとこまで行って、掘りましたいね。』（忠地せい・明治40生・入山）

「むがしは、女衆むすめは、えれえ掘ったむんだんね。ええ値で売れたでねえ。』（忠地亀一・明治24生・入山）

値が良いので、争って掘る者が多いが、掘りすぎると山が荒れるので（一度掘ると、もとに戻るまで、一〇年はかかるという）、人数制限をして掘った部落（川浦）も、あったという。

#### 4 ワラビ根掘りの道具

カマ・ナタ……上にぞくぞくと出たワラビの木や、雑草、柴などを刈りとる。

ワラビホリックワ……芝をはぎ、ワラビ根をオコスに使う。

ショイナワ……荷縄。採取したワラビ根を背負って帰る。このうち、ワラビホリックワに特徴がみられる。

ワラビ根は、太く、大人の指ほどもあるし、四方八方に入り乱れている。それをこじてとる必要があるため、柄と鉄の接着部分に、普通の畑作業以上の力が加わるので、カシなどの硬木の股木を、自然のままに利用した独特の鉄が



ワラビホリックワ 自然木の股木をそのまま利用してある

考案された。また、金属部も、かたい芝を切り、木の根、ワラビの根などを切りとれるよう鋭く作られ、自然木の鍛の先端にはめこまれた。

奈川村古宿部落には、ワラビホリックワを専門にうつ鍛冶屋が、昭和三〇年頃までは営業していた。鍛の先端の消耗度は激しいので（三年ほどで使用できなくなるといふ）たえず打ち直し、作りかえをせねばならず、繁盛した野道具鍛冶だったともいふ。

「ワラビの根は、親指つくれもあって、バリバリして出てくるで、かたいところほって、こじなけりやならん。カシの木の木についたなりの二股ふたまたを使うんだ。ほうしりやあ、よほどのものを掘ったって折れやしねえ。」（忠地亀一・入山）  
「ワラビホリックワの刃は、すぐへるで、刃を長く作ったむんだ。」（奥原繁藏・大正3生・川浦）

## 5 シバハギ（芝はぎ）

### ウワシバハギ（上芝はぎ）

地表に出て生えているワラビの木、雑木、雑草を刈りとつてから、ウワシバをハグ（ウワシバむくとも）。

ウワシバは、五尺×三尺程度の長方形で、厚さ五寸くらい（ちょうど畳一畳分くらいをいう）を一度にはぐるので、その三辺にあたる部分に、ワラビホリックワで、幅三寸、深さ五寸程のみぞを切る（これをトモオ キルという）。次に、ウワシバの下部のところどころへ鍛を入れて浮かしてから、ベタンとむきかえず（トモオ カエス）。一日に、六、七枚の芝をむくのがせいぜいであったという。

また、新しく鍛を入れた土地で、はじめの一枚の芝をはぐことを、シバクチオ アケル（芝口をあける）といい、ワラビ掘りの作業の中でも、もつとも苦勞な仕事であった。  
ナカシバハギ（中芝はぎ）

ワラビ以外の草の根などをとるために、上芝をはぐと同一要領で、今度は一尺くらいの深さまで掘り起こしてとり除く作業である。

### ワラビ根トリ

浅く掘るところで一尺、深く掘る必要のある山では、二尺も掘ったところに、ワラビの根がある。それを手で抜きとる。なるべく長く引き抜くように努めるのだという。

「ワラビの根は、ナカシバの下に、それこさやえもんじになつておる。根っこは、なるべく長いまんまとるんで、長いもんは、三尺以上もあるし、一尺くれえんのもある。とつたらそこでよりわけて、直径七寸くれえの大きさの束にまんなかを束ねて、シヨイナワでしよつてくるだが、一日で、三束か四束ばかりできましてらいいね。」(古幡はつ江・黒川渡)

### 二 ワラビウチ(ワラビ打ち)

背負ってきたワラビ根は、小さい流れ川をせきとめて作ったフチ(淵)に入れ、長い柄のついたクマデでかきまわしながら土をおとす。

「とってきた根は、流れ川でほとばして、クマデでさくさくとまじつて洗う。」(古幡はつ江・黒川渡)

洗ったワラビ根は、自家製のザル(ササを編んで楕円形に作った、平らな皿様のザル。たて三尺余り、よこ二尺程度。ワラビの根を入れる専用のものとしてあつた。)に入れ、夜なべ仕事にたたくつぷす。

各家の軒下には、表面が平らで、三尺×二尺程度のタタキイシ(叩き石)がすえられて、ワラビ打ち専用のキギネ(木ぎね。キネの直径一〇〜一二、三センチ、長さ五〇センチくらいで、中心部に五〇センチほどの柄がついている。)が、用意されていた。

「キネは自家製で、山からコナシの木をとつてきて作った。普通だとわれたり、むくれたりしるから、かたい木がいいつていって。」(古幡はつ江・黒川渡)

「一人か三人でたたくことが多かった。トン・トン・トン・トンと調子をとつてなあ。白くつぶれるまでたたくですいね。」(忠地せい・入山)

「ワラビ打ちは、子どもの仕事にもなつとつた。キネも、大人のはでかく、子どものやつは小さくできていたりして。」(奥原繁蔵・川浦)

「ワラビの根は、つぷすと、ぬるぬるとねばつこくなる。汁つていっても、水みてえには、流れちまうもんじやないが。」(古幡茂留・明治42生・黒川渡)



### 三 ワラビ根の精製

#### 1 ミズブネ

たたきつぶしたワラビ根は、ミズブネに入れ、水を注いで、クマデで水とかき混ぜる。

その際、ミズブネの中で、ワラビ根の髓であるコガスを取り除く作業を行う。コガスには、澱粉が含まれていないが、川浦部落などでは、これを保存しておき、冬仕事に鉛筆の太さくらいの縄（スジナワ）にない、自家用にしたリ売却もした。垣根などをしぼるのに、丈夫で良いといわれたが、黒川渡部落などでは逆に、スジナワは弱いといわれ



第4図 フネ 現在も清水をひいて、水場として利用している

ほとんど捨ててしまったという。

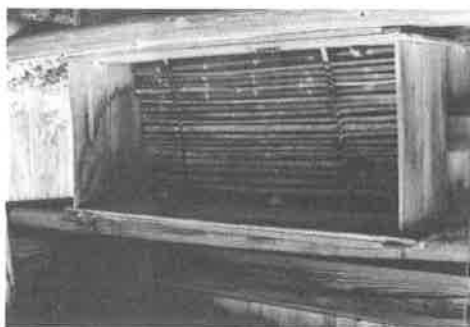
フネは、直径一メートル以上もある大木（モミヤクリの木がくさらずに良い）を二つわりにした後、自分で彫って作る。長さ三メートル、彫ったみぞの部分は底部が丸く、長さ二・五メートル、幅五〇センチ、深さ五〇センチ程の大きく深いものである。ワラビ根の精製作業には、ミズブネとタレブネの最低二丁は必要であったが、川浦部落のように、採取してきたままのワラビ根の土を洗い落す場合にも、フネにためた水を使うために、都合三台のフネを並べて作業する習わしの地もあった。

#### 2 タレブネ

ミズブネの中で水に溶けたワラビ根の澱粉を、ひしゃくでタレブネに移しかえる。

その際、タレブネの上に、コシキをひいて、根のカス（上皮や繊維の部分）などを取り除く。コシキは、長さ五尺×幅三尺、深さ一尺くらいのもので、上に置くスタレは、川柳やササを編んで作った。

「タレブネの上にあげたコシキに、細かくうちくだったワラビの粉の水を、木のヒシヤクの柄の長いのでくみこんでなんべんかなんべんかやつとると、うちくだった細かいカスは、コシキへたまつて、下へ、粉の水がたまつていく。」



第5図 コシキ タレブネの上にかけて、ミズブネより澱粉水を注ぎこむ。

(古幡はつ江・黒川渡)

タレブネの底にたまった、ワラビ根の澱粉は、ハナとよばれる。いわゆるワラビ粉である。

ワラビ根掘りからタレブネまでの作業を、三日続けて、三日分のハナを同じタレブネに沈澱させてから次のコシオケに入れかえる。

### 3 コシオケ

三日分のタレブネの澱粉は、底からシロバナ(白バナ)、クロバナ(黒バナ)の順に、六つの層に分離して沈澱している。四目めに、それを再び水に溶き、コシオケの上にかけて細かい網の目のフルイでこして、コシオケの底に再び沈澱させる。細かなゴミを除去するとともに、晒しながらアク抜きをも兼ねる作業である。コシオケの底にたまったワラビ粉は、三、四日間そのままに放置しておく。

「朝やったのを、一日木舟の中へ入れとくと、すっかり沈澱して、またあしたなさ(あしたの朝)もいって、水だけ捨てておんなじことをやって、三日はためるですね。タレブネの底には、シロバナとクロバナがわかれて固くたまるんで、その三日分をヒトオコシ(一起し)ってって、カナポーチョ(金包丁)で起す。」(古幡はつ江・黒川渡)

### 4 ハナオコシ(蕨粉起し)

水をとりかえながら、三日〜四日水に晒したハナをハナオコシする。

コシオケの底に固く沈澱したワラビ粉は、上部にクロバナ、下部にはシロバナが分離して二層になっている。カナポーチョ(金包丁。刃先の部分を、タレブネの底部のカーブに合うように曲げて作った小型の包丁。刃わたり五寸程度。村の鍛冶屋に作ってもらったという。)で、まずクロバ

ナをはぎとり、次にシロバナを大きく割つてとり出す。クロバナは、そのまま自家用にするが、シロバナは、大きなカツパ（かたまり。かけら。）にして出し、手のひらでもんで、細かな粉にした上で、一〇日間程、陰干しにする。天日で干すと、乾燥は早いが赤味がかって、商品価値も落ちるので、軒下や蚕のアマダナ（天棚）を使ってじっくり乾燥させるのが良いという。

## 5 クロバナとシロバナ

三日かけて採取したワラビ根を精製すると、シロバナが八升から一斗、クロバナが一升程度とれる。

シロバナはすべて売却するが、クロバナは売りものにはならないので、もっぱら自家用にする。ソバ粉とませてソバヤキモチにしたり、みそ汁に入れると、粘りがあって美味である。また、そのカツパを、いろりのオキ（炭火）の上のせて焼いて食べるのも、子どもの楽しみだったという。

「シロバナは、さらさらとしてうつつくしい。また、食べるとうまいもんだが、もってなくて（もつた）いなくて。惜しくて。うんと大事にして売った。クロバナもうつつくしいまっ黒でネチッコイ。少しアクツっぽい、ソバ粉の中へませて食べると、うまいもんだ。黒い色をしてるのは、アクとワラビの皮なんかが少し混ってるからだと思う

がねえ。クロバナは、粉にしなんで、生のうちに食べちまった。」（古幡茂留・黒川渡）

## 四 シロバナの売却

### 1 ワラビ粉商人

シロバナを買うアケンド（商人）は、飛騨寄りの部落へは、高山方面から、信州寄りへは、東筑摩郡山形村、朝日村、南安曇郡梓村（現梓川村）のナカシ（仲買人）が入った。

飛騨からの商人は、ワラビ粉買いが専門で、現金売買だった。東筑摩や南安曇のナカシは、米を運びこみ、米代と交換に、ワラビ粉や木炭（『西筑摩郡誌』—大正四年刊—によると大正二年の郡下の木炭産額は、七三三、四五〇貫、価額五一、四四二円であったという。）を代えていった。また、奈川にも、副業に仲買をしていた人が数人あったという。

「高山あたりからきていた人だっというが、ワラビの根を掘る時分になれば、ワラビのシタをみて、この根には、ハナがある。ハナがないなどと教えて歩いて、えっしょけんめいなアケンドだった。高山のアケンドは、ええ値で買っ

ていったでなあ。(奥原喜運治・明34生・川浦)

「こは、大体清水屋しみずやのじいさん(黒川渡の酒小売業者。ワラビ粉の仲買いもした。)に売ったわね。亀吉とかつていう名の人らしいが、野麦のカメアケンドとかつてよんでた人がきて、それは、ええ値で買つてくからなんていいましたがねえ。(古幡はつ江・黒川渡)

「このシロバナは、梓あざの立田たてのの川上商店が、七割かた買った。昭和一五、六年までのことじゃが。梓から米をつけてきて、それとの交換じやつた。(忠地亀一・入山)

## 2 シロバナの取引相場と収穫量

シロバナは、手をかけているだけあつて、いい値で売れた。買いとる商人によつて多少の差はあつたようだが、大正初めには、一升五〇銭〜八〇銭、一日三升平均とれたというから、一日掘れば、二円以上の収入となつた。男子の日当が、三〇銭〜四〇銭の時代である。

それが、昭和初めには、一升一五円以上の高値になつたという(古幡茂留・黒川渡)。また、米と交換する場合にはいつの時代も、同量の米の二倍の相場で取り引きされてた。

畳一枚分程のウワシバを、一日六、七枚はくと、ワラビ根は五貫匁〜六貫匁収穫できる。それから、三升程度のシロ

バナを精製するのであるから、歩留り一五〇程度の低率であり、しかも手数がかかる。高値で取り引きされる貴重品であつただろうこともよくわかる。

統計では、大正二年の西筑摩郡下でのワラビ粉生産額は一〇〇石、価額三五〇〇円と記されている。(『西筑摩郡誌』長野県西筑摩郡役所、大正四年八月刊。当時、奈川村は、西筑摩郡に属していた。)

奈川村では、一人一シーズン六斗から一石の収穫をあげたというから、奈川村をも含む西筑摩郡では、一五〇人程度が、ワラビ粉生産を副業にしていたということにもなるうか。

ちなみに、少し遅れて、大正十二年八月刊行の『南安曇郡誌』(南安曇教育会刊)は、大正九年の郡下のワラビ粉について、数量七三六貫、価格一二、六〇〇円、従業戸数七八戸、従業人数一〇三人と報じている。

この七年間のワラビ粉の価格は、統計単位は異なるが、換算してみると、一升三五銭より五円強に暴騰した。先にも記したように、それが更に、昭和初めには、三倍近い一五円以上にもなったというから、貨幣価値の変動を考慮しても、更に貴重な扱いをうけるようになっていたということであろう。

## 五 ワラビ粉の用途

クロバナは、売りものにならず、自家の食用とした。シロバナもすべすとした、それこそ味の良い澱粉だが、ここでは、全くの貴重品扱いで、自家での消費など思ひもよらなかつたという。すべて、仲買人に売却し、または米と交換して、村を出ていった。

シロバナを買いつた仲買人は、非常に美味なので、ワラビ餅などの食用として売つたが、それはごく少量で、主にカラカサや蚕網の油紙をはる糊として売却したという。「カラカサの紙をはるにや、あれでなきやいかんといつていた。」(奥原喜運治・川浦)

「買つてつたアケンドは、カラカサ屋やチョウチン屋へ売るつてつてましたわね。ありやあ、糊が強いで、油の紙でもひつつくつていうでね。」(奥原はつ江・黒川渡)

「ワラビ餅つても、ふんとうまいむんですいね。じやが、そんなものには、もつてなくて(もつたいたなくて)あんまり使わなんで、糊に使う方が多かつたらしいわね。」(忠地せい・入山)

「ワラビ粉は、織糸の糊付け用として、桐生・足利や甲州など古い機業地に出ていった。」(横山篤美・安曇村)

## おわりに

乗鞍火山麓、一〇〇〇メートル以上の高地に位置する奈川村は、かつては、純粹な農業集落ではなかつた。飛騨から信州へ通ずる野麦街道の往来人に頼る交通集落としての機能をもつていた村である。

しかし、中央西線、高山本線の開通によつて、街道交通が衰微すると、他に現金収入源を求める必要がでてきた。耕地を奈川の河岸段丘に開いて、主に雑穀類を作り(奈川村村政要覧)によると、戦前までは、ソバ、アワ、ヒエ、キビ、大豆、小豆などの雑穀類の作付面積が米のそれを上回わり、約一〇倍にあつてゐる。昭和七年の場合、米二五四反歩、雑穀類計二、〇九〇収歩)、周囲に広がる広大な村有林、部落有林に頼つての、冬の製炭が盛んになつた。(製炭は、大量に行われ、昭和一〇年代には、米の生産額の二倍近い十万余りが商品となつてゐる。この村第一の商品生産品であつた。「奈川村村政要覧」による。)

このように、現金収入を求めていく傾向の中で、ワラビ粉製造も、農閑期の婦女子の副業として重要な価値があつた。

ワラビ根掘りは、難儀する労働で手もかかるが、夜なべ作業もきき、何よりも高価な商品となる。一戸平均一石程度の収穫があつたというから、米と交換しても七、八俵に

なる。米が少なく、現金収入の道も乏しい山村の人々が、精出してつとめたのもっともなことであった。

しかしその後、開田事業の促進、養蚕・畜産など商品生産農業の導入、水力発電所の建設等による生活実態の変化に伴って、この副業も全く消滅してしまった。早い地域では、五十年、六十年も昔の語り草でしかない。この度の調査を通して、この習俗の聞き取りさえも不可能な時期が、間近であろうことを痛感させられた。

しかし幸いにも、奈川村では、新しく民俗資料館が建てられ、内容物の整備作業が進められている。関係者によると、尾州固船、製炭関係の資料と並べて、ワラビ粉製造についての習俗も可能なかぎり復原して納める努力がなされるという。誠に喜ばしいことであり、その資料によって、学ばせてもらえる日の近きことを祈念するものである。

最後に、この小論をまとめるにあたって格別のお世話をいただいた奈川村教育長古幡茂留氏、安曇村在住の郷土史家横山篤美氏はじめ話者の皆様にあつく御礼申しあげたい。

### 〈参考〉

#### 1 ハナオンナ

当時、村では、ハナのある根を探し出すことがうまく、多くの収穫をあげ得る女性をハナオンナといって羨望し、

高く評価したものだという。

「わたしの姉は、ええワラビの根をめつける（みつける）

ことがうまくて、ハナオンナだなんてよばっておった。また、こんどのオコシは、一斗もあつた。そりゃあ、ハナオンナだなんてね。神様がさずけてくれただわなんてつて、うらやましがつたわね。ヒトオコシで一斗以上もとる人のことは、そんなこといいましたんね。」（古幡はつ江・黒川渡）

#### 2 ①川上商店について聞き書き

梓村立田の①川上商店の主人川上龍太郎（故人）は、奈川村へ米と酒を出し、交換に、ワラビ粉と木炭、蚕繭を仕入れる商売をしていた。当時は、手広く行っていたというが、後継者に恵まれず、またこの商いに先行きの不安を感じて店をたたんでから四十年になる。現在は、縁者も転出し、不明の部分が多いが、多少の聞き書きによって往時をしのんでみた。

「①の主人つてのは、えらいアケンドだったわね。栄えた店だったつていたが、いつもつぎのあたったモモシキでしりつばさみして。立田で米をついて、送ったり売ったりしていた。そのカマスにワラビ粉を入れて出したんじや。ワラビ粉は粉じやから、②のカマスじやなけにやあ、もるつていつてな。③のカマスは、ワラを五〇〇匁使うとこを、八〇〇匁も使つて、てえねえにこせてあるで、もれ

ねえ。ワラビ粉は、ほとんど①へ売りましたなあ。その時期になると、主人が若い衆や稻核の出張所の衆をつれてきて、おらどこへとまっていたわ。旅館をやっていたもんでな。昭和十五、六年時分の話じゃが、②も、今はすっかりつぶれちまってる。(忠地亀一・入山)

「③は、わしとこの本家だが、今は、家もねえだいな。」

わしも、集金の手伝いで、はたち時分に、奈川へいったが米の代金が、なかなか払えねえ家もあったな。だで、金でとらなんで、ワラビ粉や炭と代えつらいね。へえ商売やめて四十年にもなるが、その時分にああ、みんな牛で運んで広くやってただわな。(秋山一人・明治29年生・梓川村立田)

「④もきましたが、主に米と酒をかうだけで、ワラビ粉はこの村の清水屋のじいさんに売ったわね。」(古幡はつ江・黒川渡)

### 3 ワラビ粉

デンプンを含んでいるワラビ(蕨。Bracken)の地下茎を水洗したのち、臼でついて細碎し、水洗、沈澱の操作を繰返してつくったものである。奈良・福岡などが特産地である。(桜井芳人著『総合食品事典』)

### 4 ワラビ餅(わらび餅)

ワラビ粉に同量の砂糖を加え、その容量の一・二五倍の水を注加し、とろ火にかけて練り、これをちぎって蒸器で

蒸したもので、ふつうには黄粉をつけて食べる。(『総合食品事典』)

註1聞き取りは、筆記とテープレコーダーを使用し、話されたことばをなるべく忠実に文字化した。

2 語り手よりの聞き取り資料をそのまま生かしたので、重量・長さの単位は、不揃いであるが、そのまま表記した。

3 本稿は信濃史学会誌「信濃」(昭和五十四年一月一日号)に発表したものに手を加え、許可を得て転載したものである。

(現松本深志高校教諭・長野県史編纂委員会  
民俗調査委員・長野県民俗の会会員)

話者スナップ











▼話者一覧▲

次の皆さんに話者としてご協力いただきました。あつく御礼申しあげます。(敬称略・順不同)

〈信州側〉

古幡茂留・奥原豁郎・大野弘喜・鈴木義道・奥原喜運治  
忠地亀一・奥原長左衛門・奥原樹男・向井つる代・奥原  
ふで・川瀬光次・向井清・斎藤安江・富田勇次・奥原幸  
男・勝山徳治・勝山はなえ・勝山さい・奥原鈴江・奥原  
和一・奥原保・古幡はつ江・忠地せい・奥原正人・百瀬  
竜太郎・忠地義光・池田今朝蔵・奥原繁雄・奥原かねよ  
・奥原りん・奥原しう・奥原うめ子・奥原政一・丸山長  
十・奥原琴江・橋本成美・小林林一・小林丈久・奥原つ  
るゑ・奥原光三郎・高宮忠義・奥原はつみ・勝山松江・  
丸山やえの・中村策男・奥原吉男・奥原太仲・奥原由利太  
郎・忠地兼一・奥原すみえ・小林賛吾・奥原きぬ・横山  
篤美





文芸クラブ員名簿

▽昭和五十二年度△

三年

保科孝子・山口恭子・窪田千恵・塩沢正子

▽昭和五十三年度△

三年

曾根原かよ子・唐沢恵津子・藤原志津子・

三村さゆり・赤羽美和子・乃木千草・酒井

真光

二年

丸山有香・小笠原節子・柴田かおる・二木

淑江・米窪歌子

一年

勝家絵里・中村沙恵子・藤原孝美・三沢葉

子・矢花美由紀

顧問 征矢野宏・細川 修

## あとがき

昨今、民俗ブームとか民話ブームとかいう風潮がエスカレートしている。

本屋の店頭には、机上で途方もなくふくらまされ、破れつ寸前とも思える話の数々が、色鮮やかなさし絵に助けられて、跳梁しているかみえる。

生徒諸君と一緒に、年老いた人々の重い口もとからぼつりぼつりとこぼれ落ちる話を訪ねまわって幾年かが過ぎた。しかし、あの色鮮やかなはずむような話は一つも聞き得なかった。根が生えたようにずっしりと重く、にぶくすんだ光が、かすかにみえる話ばかりである。

生徒たちも、最初はもつときらびやかな昔話絵本からそつくり抜けてきたような話の聞けるのを期待していたふうで、つまらなさそうにみえた。

しかし、自らの足で、幾度も探り歩いてみると、名も無い庶民の語りつく伝承のずっしりとした重みの方にひかれてくるようだ。採訪の姿勢もようやく地についてきたように思う。昨夏などは、下級生を指導しながら、採訪のひとり歩きができる三年生が幾人か生まれた。嬉しいことである。高校生のクラブ活動研究は「足で勝負しろ」とくりかえし説いたこの意味と面白味がようやくわかりつつある

クラブのように思えるからである。

願わくば、こういった地道で労多く実証的な研究が、先輩から後輩へとひき継がれていくクラブ活動であつてほしいと思う。そして更には、貴重な祖先の心の記録を後世に生かすことができれば、それこそ素晴らしいことだと考えている。

クラブ活動の成果は、文芸部やクラブ員諸君の成果ではあるが、終始お世話になりながらも、気持ちよく調査させていただいた地域の方々に、報告書の刊行というような形でお返ししていくのが学恩というものであるうとも考える。また、今記録しておけば爾後長きにわたつて残っていく。つたない冊子でも、貴重なものであることはまちがいない。

ちようどそんな風に考えていた時、ありがたくも周囲のお勧めと「たつのご書店」社長一ノ瀬和本さんの採算を度外視したご援助により、かつてのガリ版刷りの粗末な報告書二冊をまとめて立派な書物にまとめていただくことができた。

もとより、まだまだ調査不足で、今後とも皆さまのご叱正をいただきつつ補正していかなければと思つている。厳しいご教示をいただき、生徒諸君の柔らかな可能性をひきだしていただけたらわれわれの喜びの上はない。

最後に、誠にお忙しい中ありがとうございましたおことばをいただきました松谷みよ子先生と野麦ボツカと奈川の牛方についてのご高論を心よく提供して下さった胡桃沢勸司さんにあつく御礼申しあげ、文芸クラブの諸君の精進を更に祈念して筆をおく。

なお、さし絵・カットは、本校OBで東京女子美術大学一年の丸山邦江、文芸クラブ員で三年生の赤羽美和子の両君が担当し、写真は、一ノ瀬和本さん、胡桃沢勸司さん、征矢野、細川が撮影したものを使用した。

長野県松本美須ヶ丘高校文芸クラブ顧問

征矢野 宏  
細川 修



## 編集後記

五十二年度は奈川村、五十三年度は高根村を拠点にして野麦街道沿いの村々に伝わる伝承を調べ、各年ともに粗末ながらもガリ版刷りの報告書を作った。それに手を加えてまとめたのがこの冊子なので、ここではそこに記したものをそのまま転載して本書の編集後記とした。

### ▼昭和五十二年度▲

「奈川村は山奥の村で、しかもどちらへゆくにも峠をこえるか、深い峡谷をながながとあるいて行かなければならないようなところで、いわば「陸の孤島」といってもよい山中である。村の境域は実にひろいのである。奈川村が一・九平方キロメートル、安曇村は四〇六平方キロメートル。この二つで南安曇郡全域の六一％余りを点めているのだが、人口の方はいたって少なく、奈川村が一平方キロあたり一九人、安曇村は八人にすぎない。」（宮本常一著『私の日本地図』）

今年には野麦街道沿いの奈川村を中心に調査しました。村の最奥の川浦部落の公会堂で、できれば野麦峠を越えて

もみようとほりきって合宿にはいったのは八月一日（月）でした。それから二泊三日。暑い日盛りの中を重いテープレコーダーを肩に、採集できた話の数々をここにまとめて発表します。古い街道につらぬかれた村ですから、それにまつわる古い文化が残されているのではないかと期待してはいったのですが、この山深い村に今も脈打つあたたかい人の心に助けられつつ予想以上の成果をおさめることができました。

山仕事の合間に伝説の場所までわざわざ案内してくださったおじいさん、お昼休みにおじゃましてもお茶まで用意してくださったおばあさん……。どなたかわかりませんが公会堂の玄関にいつばいおいていつてくださった野菜もおいしくいただきました。公会堂も今まで外部の者の宿泊には貸与したことはなかったとお聞きしています。特にご配慮くださった川浦区のみなさんありがとうございます。村の教育委員会のみなさん、川浦区長さんには格別のお世話になりました。御礼申しあげます。まだまだ不十分な調査で終わっています。今後も続けていこうと考えています。よろしくお教えください。

（五二・九・三）



## ▼昭和五十三年度 ▲

来る年もまた来る年もキカヤへ出かせぎにいく貧しい娘たちのふみしめた道、野麦街道。飛驒の塩ぶりを背にしたボツカたちの難渋しつたどつた道、野麦街道。そんな、名もなき民衆の足跡の重みにひきつけられて、この街道筋に残る民俗を記録しようと活動し始めてから二か年がたちました。今夏も奈川村・高根村（岐阜県大野郡）の多くの方々にお世話になりながら二泊三日の合宿調査をしました。昨年度は、野麦街道の信州側を調査しましたので、今年度は飛驒側をも含めて行いました。峠の両側の採訪をしてみても、はじめて国境を越えての文化交流の姿に、いくぶんか触れ得た思いがします。峠をはさんで両県に同じ話、または類似した話がいくつかありました。峠を境にして、言語生活（方言）には、大きな違いがありました。一つの世の、どこに住んでいる人々も、求めるところは同じであることがわかったような気がしています。

その成果を『わたしたちが調べた野麦街道の民話』として、まとめてみました。よろしくご叱正いただければありがたいことです。まだまだ不完全なのですが、さらに調査させていただき、もっと多くの方々に、もっと多く読んでいただけるような書物にまとめて、お世話になった皆さん

んにお返しできればこれほど嬉しいことはありません。これからもよろしくご指導ください。

最後に、お世話になりました皆さんに、紙上をかりて、あつく御礼申し上げます。  
(五三・八・二五)



文芸クラブ員

私たちの調べた

# 野麦街道の民話

(奈川編)

昭和五十四年六月三十日 初版発行

昭和五十四年十月一日 再版発行

昭和五十六年二月一日 三版発行

平成二十四年三月十五日 四版発行

(奈川編として)

採 集

長野県松本美須々ヶ丘高等学校

編 著

文 芸 ク ラ ブ

編 著

征 矢 野 宏

印刷・製本

細 川 修

発行責任者

(株)ブラルト  
松本市奈川公民館

この図書は、長野県松本美須々ヶ丘高校文芸クラブ採集「私たちの調べた野麦街道の民話」(征矢野宏・細川修編著 たつのご書店 昭和五十四年)から奈川村に関係する箇所を抜粋したものです。